



次 目

文明の愛護と大成(時言).....	本 多 日 生
一、緒言.....	
二、宗教革命の失敗.....	
三、政治革命の失敗.....	
四、經濟革命の失敗.....	
五、労働者の地位.....	
六、西洋文明の流弊.....	
七、人類文明の生命.....	
八、先人の遺徳.....	
九、先帝の遺徳.....	
一〇、軍人の忠烈.....	
一一、高僧の遺業.....	
一二、現代人の輕佻.....	
一三、教化基本の動搖.....	
一四、教化基本の存在.....	
一五、國家理想の卓越.....	
一六、附和雷同を諷む.....	
一七、國民性を守持せよ.....	
佛敎信仰の正統.....	本 多 日 生
我等の準備.....	佐 藤 鐵 太 郎
日本國の使命.....	野 澤 悌 吾
無我の謬見.....	本 多 日 生
記事、報道十數件.....	

第 四 十 四 年 六 月 號

8	7	6
1	5	9
2	3	4

發行所東京神田區本町三丁目四番地電話百十二

爾の時に世尊、波斯匿王等の諸の大國王に告げたまはく、諦かに聽け、諦かに聽け、我れ汝等の爲に護國の法を説かん、一切の國土若し亂れんと欲する時は、諸の災難あり賊來りて破壊す、若し國亂れんと欲する時は、鬼神先づ亂る、鬼神亂るゝが故に即ち萬人亂る、當に賊あり、起つて百姓衰亡すべし、國王太子王子百官互に相是非し、天地變怪あつて日月彗星時を失ひ度を失ふ、大火大水及び大風等は、是の諸の難起るべし、諸の國王等國を護り、自身を護らんと欲するが爲には、亦た應に是の如く此の經を受持し讀誦し解説すべし。

(仁王護國般若波羅密多經、正大藏第十五套の九)

諸の所説の法、其の義趣に隨つて皆實相と相違背せし、若し俗間の經書、治世の語言、資生の業等を説かんも、皆正法に順せん。

(妙法蓮華經法師功德品第十九)



文明の愛護と大成

(大正九年四月二日自愛會名古屋支部創立大會の節同地國技館に於て)

本多日生

目次

- 一、緒言
- 二、宗教革命の失敗
- 三、政治革命の失敗
- 四、經濟革命の失敗
- 五、勞働者の地位
- 六、西洋文明の流弊
- 七、人類文明の生命
- 八、先人の遺徳
- 九、先帝の叙慮

- 一〇、軍人の忠烈
- 一一、高僧の遺業
- 一二、現代人の輕佻
- 一三、教化基本の動搖
- 一四、教化基本の健存
- 一五、國家理想の卓越
- 一六、附和雷同を諷む
- 一七、國民性を守持せよ

以上

一、緒言

今夕は自慶會の趣意に於て講演を聞くことに相成つたのであります。自慶會と云ふのは労働者の爲めに設けられて居る所の會であります。但し、労働者の地位を高め幸福を増すといふことに於ては、一般の労働運動と目的を同じうして居るものでありますけれども、その方法は少し變つて居るので、それは極めて穩健なる立場に於て、一面には資本家、富豪の文明に對する所の自覺を促し、一面には労働者の自覺を促すといふやうな立場で、一方に囚はれて居る會合ではない、所謂労働者の爲めに資本家と闘ふとか、労働者の地位を高める目的に於て社會の秩序を壊すといふやうな意味の事は、全然反對する所の會合であります。それで自慶會の趣旨は別に趣意書もありますから尙ほ能く御承知を希望致しますが、その趣意の下に今後明後き講話をすることに相成ると思ひます。こゝには「文明の愛護と大成」と云ふ題で所見を申述べやうと思ひます。

この意味合は、今までに造り上げられて居る文明の善い所は能までも大切にこれを保存し、擁護して行かなければならぬ、又足らざる所は次第にそれを補ぎ足して、さうして理想の文明に達するまでに造り上げて行かうとするので、この考は何人も反對すべきものでなからうと思ふのである。所が今日の變れる思想の中には、過去の文明を一概に呪うて、さうして改造といふことを叫んで居る、無論その改造論の中に採るべき所もありませんけれども、又一方には名を改造に藉りて過去の文明を破壊するやうな意味が、次第に強く現はれて來て居る。若し是までに造り上げた善き文明をも打捨てるといふことになつたならば、縱し今造り換へやうとする思想が善くとも、一つ善い物を捨てて一つ善い物を捨てれば、とゞである一つ善い物を捨てて二つ善い物を捨てたら一つ損が行く、同じ一つでも拾圓金貨を捨て、一錢銅貨を捨てたら九圓九拾九錢の損が行くではないか。左様な譯で新しいものを取り入れると云ふ事は反對すべきことでないけれども、吾等の先人が血と涙とを以つて築き上げた大切なる文明を、その意味をも理解しないで、惜氣もなく打捨てることと云ふことがあつたならば、是は不心得の至りと謂はなければならぬのである。西洋の方では革命と云ふことを唱へて、宗教上にも非常なる大變革を來たし、政治上に於ても革命をやり、又近來は經濟上に於ても革命を唱へて、之を第三革命と稱して居る、その事柄は一體見ると良い事のやうであるけれども、深く研究すると云ふと、この三大革命と云ふものは決して模範的なものではない。

一、宗教革命の失敗

假にその缺點を言ふならば、宗教革命に於て、宗教の教權といつて定まつて居る所の教義上の解釋を攻撃して、自由思想と云ふものを唱へて、自分の新らしき考を以つて宗教の説明をしようとしたことは、一方には進歩があつたけれども、今までの定まつて居る教を攻撃する態度に出た爲めに、次から次へと宗教の議論が變つて行つて、さうして定まる所を知らぬから、今日次第々々に宗教の權威が衰へてしまつて、結局は宗教が衰頹することになつて居る。どうしても教といふものには——それは舊くなれば弊害も生ずるから矯め直さんならぬ所もあるけれども、何處まで行つても變へてならない永久に續いて居る生命、永久に續いて居る本質と云ふものが無いと、その權威を失ふのである。それ故に宗教革命には一方に舊い弊害を破つたこともあるけれども、宗教の一番大切な所の不滅の生命を衰ふことになつて、結局バイブルも信用するに足らない、誰が言つた事もそれは勝手に言ふだけのことで、俺もそれと考へが違ふと云ふやうなことで、互にやつて行つた結果は、全體として宗教の威信といふものを衰ふに至つて、今は基督教の名に依つて働いて居るやうな人でも、多くは社會運動に加はり労働者の爲めに働くとか、慈善事業の爲めに働くとかいふことに於て、宗教そのもの、本領からは遠ざかつて居るのである。故に嚴密なる意味から見れば、宗教革命に於ても大なる失敗がそこに伴つて居ることを發見するのである。

三、政治革命の失敗

政治上の革命に就ても同じ事があるので、成程従来の憲制政治を打破した點に於てはよい點もあるが、自由の思想が大策に勢力を得て、終にその極端に趨る所、今日世界を擧げて人類の禍ひとなつて居る、この澎湃たる個人の權利及び自由を主張する所の思想、その突走る所は遂に露西亞の如く國家の組織をも破壊するに至り、様々なる危険的思想が起つて始末が悪くなつて來た。これは近い所には色々の原因もあり、又他の方面から觀察し得る理由もあらうけれども、大體は佛蘭西の政治革命の中にあつた自由思想に缺陷があつたので、最初は善いやうに見えたけれども、その思想が旺盛を極むるに至つて、終に今日の弊害となり、一番長所のやうに思つて居る自由思想といふものゝその中に、今日の世界の禍の種が含まれて居つたのである、皆が極端に自由を主張するといふと、終に衝突のみ多く成り、個人の自由の爲めに國家の統率が出来なくなり、絕對の自由を叫んで、國家をも破壊し、財産制度をも打破し、一切の現在の文明を呪ふといふやうな恐ろしきものもその中から出て來るのである。アナキズムといふ無政府主義、若くはボルシェヴィズムといふ過激思想、或はサンチカリズムといふ資本家撲滅運動といふやうなものは、やはり個人の自由思想の趨る所、そこに至つて居るので、その病弊の源は佛蘭西革命に在りといふことは、これ亦識者の一致する所であらうと思ふのである。それ故に政治革命に於ても、壓制を打破した點は良かったやうである。けれども考へ、の足らぬ所があるから、遂に今日のやうな弊害を生み、人類全般の禍ひを生むやうな大失態を來たしたのであります。

四、經濟革命の失敗

續いて終に行はんとして居る所の第三革命、即ち經濟組織の革命と稱するものも、資本家の横暴といふ事のみを考へて、

之を打破するといふ點から見ると愉快な運動のやうにも思はれるけれども、一方に労働者の横暴といふものが起つて、又労働者の横暴の中には様々なる危険なる状態が伴つて居るので、即ち露西亞でやつたのが第三革命の一種であります。彼は經濟上の組織を改め唯労働政府を作つて、労働者が天下を取つたのである、資本階級を打破つて銀行も掠奪し、資本家の頭をどぶき倒して、あらゆる所有權を廢止してしまつたのである。一時は頗る面白いやうに思つた人もあつたらうけれども、今日より見れば露西亞の國民は如何にも憐れな状態になつて居るので、西伯利亞あたりに行つて實際を見て來た軍人の話を聞けば、實に同情に堪へない、憫れなものである。この間私九州に参りましたが、その時下の關の海に、西伯利亞から逃げて來た軍隊の乗つて居る軍艦が一隻居りました、モウ一ヶ月もそこに居るのであるが、石炭は無くなつてしまひ、路銀は無くなつてしまつて歸ることも出來ない、日々食つて行くものであるから、錢は無くなつてしまふ、この儘居れば干ばしになるより仕方がない、いつその事どんなにか工夫をして浦鹽に歸つて、どうせ戦は負けだらうけれども、寧ろ一思ひに戰場の露と消える方が宜からうかといつて、日々會議を開いて居るけれども、今尚ほ決しないといふことであつた、それは三月の二十三日に私が下の關を通つて聞いたのであります、その後どうなりましたか、恐らくは今尚ほグズグズして、次第々々に食ふ物も無くなり、夜も晝も怒嘆の聲ばかりして居るだらうと思ふ。それは僅に一例であるが、全體を擧げて露西亞の慘狀を詳しく調べたならば、實に憫れな、恐るべきものであらう、それが労働者が天下を取つた時の有様である。資本家は皆逃げてしまつて、隨つて會社が潰れてしまふから、多くの労働者は追出されて何も仕事が無い、大部分は泥棒になつたさうであるが、泥棒も數が多いと商賣にならない、軒並み泥棒といふことであつては、何處へ這入つても盜つて來る物が無い、實に話よりもひどい有様であります。それでレニンの政府も弱り果て、元の資本家を尋ね廻つて頭を低げて、「どうか戻つて會社を開いて事業を始めて呉れ、どうもあゝいふ事をやつて濟まなかつた」と言つて頼んで廻るけれども、資本家も懲りて居るから容易にウンと言はない。その一方には又レニンのやる事を攻撃して、「如何に弱つたからといつて元と敵

とした資本家に頭を低げるといふ事はない、そんなことで弱る位ならば初めからやらぬ方が宜い、干ばしになつても死んでも構はぬから資本家などに頭を低げるナ」といつて、クロボトキンといふ學者はさういふ事を言つて居る。「そこが大事な所だからモウ一つ辛抱して居れ」この先き辛抱すればみんな干ばしになつて死んでしまふ」それでも構はぬからやれツ……さうしてすつかり人が死んで野原になつてしまつた時に、草葉の蔭から幽霊になつて出て来てゲタノツと笑ふ者があるだらう、それが露西亞の結末と云ふことになるのぢやといふやうな、實に極端な事になつたのが、労働者の取つた天下の有様である。

五、労働者の地位

何故さうなるかといへば、それは労働者は一方から言へば尊とい地位に居るもので、現在の社會の組織に於て言へば、一國の工業は實に尊いもので、人間の身體に譬へたら血の如きものであるから、血が減つて行つたならば人間は斃れてしまふ、一國の經濟に於て大切なる工業が倒れれば、その國は疲弊衰弱して真事駄目になつて行くのである、軍事も駄目、教育も駄目、何もかも駄目になるから、工業は大事なものである。その工業を組織して居る要素の大切なるものは、資本と、労働と經營者と、その他二三の事があるけれども、兎にも角にも労働者といふ者は工業組織の大切なる要素であつて、而して工業は一國の血となつてその國を擁護して居るものであるから、労働者が尊といふことは誰も今日は承知して居ることである。けれども労働者のみの天下といふことになる——丁度人間の身體で言へば血ばかりで生きて居るのだといふので、生命の本を知らず、胃袋も要らない、肺臓も要らない、心臓も要らない、そんなものはどうでも宜い、血さへあれば宜いんだといつて、身體中血ばかりにしてダブ／＼になつて、それでは呼吸をすることも出来なければ、食物を消化することも出来ないで死んでしまふ。血は大切に違ひないけれども、他の色々の組織と相俟つて、循環して初めて尊い價値があることを知らなければならぬ。それ故に労働者本位とか、労働者天下といふことは、労働者に取つては、うまいやうに思ふけれども、その言葉に毒があるから、そこを注意しなければならぬのであります。

六、西洋文明の流弊

斯くして、西洋で謂ふ三つの革命は、一寸眺めて見ると美しいやうだけれども、モウ一つ深く考へて見ると、今日人類全體の禍ひは其處から起つて居る。宗教革命に依つて今日の如く宗教心が一帯に人心から薄らいで來てしまつた、政治革命からは餘り自由の思想が強くなり過ぎて、纏めることも出来なくなつてバタ／＼するやうになつた、經濟革命からは資本も倒してしまひ、工業も潰してしまつて、首吊りの幕といふやうになつて來る。斯ういふやうに深く考へて見ると西洋の三大革命が手本ではない、又その中に唱へられて居る改造といふことも、大部分の意見が誤つて居るといふ事が能く分るのであります。それ故に過去の文明を一概に呪うて之を破壊するとか、極端に改造するとかいふ今日現はれて居る意見は、遽かに首肯すべきことではないので、間違ひのないやり方は、是までの文明の大切なるものを保存し、擁護しつゝその弊害は改める、足らざる所は補ふといふので、過去の文明を愛護してさうして之を大成して行くといふ立場に立つ者が、健全なる人達であらうと思ふ。

七、人類文明の生命

元來人類の文明といふものも、能く考へると左様に切れ／＼に現はれて居るものではなくして、ズツと續いて居る脈絡があるもので、所謂生命を有つて居るのである。この偉大なる人類の文明には生命のあることを知らねばならぬ、丁度人間の身體と同じことで、身體の組立てられて居る内臓とか、或は骨とか皮とか血とか、さういふ形あるものばかりでなくして、形

の無い一種の生命が加はつて、人間といふ生きて居る者になつて居るのである。分析して是が腑である、心臓である、血であるといつて眼で見えるものだけで人間は出来て居るのではない、眼で見えない魂、生命といふものがあつて初めて人間である、生命が無くなつたら死人である、人間のかすである、灰にしても差支ない、魂を入れて初めて人間の價値があるので、魂を取つたら價値は無い、寧ろ損がある、どんなに安く葬むるにしても十五圓や二十圓は掛かる。東京で貧困者の無料葬儀といふことをやつて居る、私の主宰して居る「うごく寺」の働きの中に設けて居るのであるが、どんなに節約しても十三圓五十銭は掛かる、さうすると死人は價値が無いのみではなくして、十三圓五十銭の借金を有つて居るものである、魂があれば何圓の價値のものとも分らぬ、實に尊いものである殊にそれが永く生きて呉れやうものならば全く尊いものであります。それと同じやうに、文明といふものも唯だ形を以てのみ考へては、本當の見方ではない、その中軸を傳うて居る所の生命を尊重せねばならぬ、その生命は精神的文明であつてそれが人々の心と結びついて、所謂尊とき道徳となり、宗教となり、風俗となり、言葉となりして、人類の文明は働いて居るものである。その文明の生命はむやみに造り替へることは出来ないのである。恰も人間の魂は造り變へることは出来ない、今までの料簡は放蕩をしたり、情けたり、喪とぼけたり、仕方のない出来損いの魂だから、之を一つ造り變へやう、コラ、現、貴様は出てしまへ」といふ譯で迫出してしまつて、今度立派な性の善い理想的の魂を持つて来て、フツと吹込む、そんな事をして又蘇生つて呉れば宜いけれども、忽ち十三圓五十銭の借金を背負つてしまふぢやないか。魂といふものは造り變へることは出来ない、情け、魂なら情け、魂を殺さず、その儘にして情けぬやうに段々教へ込んで、頭を摩るなり、言うて聞かすなりして情けぬやうに、又放蕩して仕方がなければ放蕩をせんやうに、段々直ほして行くといふことは宜いけれども、造りかへろ」と云ふので、舊い魂を切り出して新しい魂を打ち込むといふやうな事をやれば、必ずや失敗に終るのである。文明もその通り、國家もその通りである、これは文明有機體といつて、その中に一種の大なる目的、生命を有つて働いて居ることを知らなければならぬ。

そこで過去の文明は容易ならぬ努力に依つて出来て居ることを承知して、之を粗末にせぬやうにといふ考が、寧ろ造りかへろ」と言つて突拍子もないことを言ふ人間よりは、大切にせよと教へる方が大事ではなからうか。

八、先人の遺徳

今朝松村陶器會社の主人が挨拶に来られて、自己の今日までの硬質陶器の事業に従事せられた経歴を話されたが、實に艱辛苦を嘗めて、幾度か倒れんとし、それが爲めに自分の身體も病氣になり、財産も失ひ、數年に亘つて實に生きるか死ぬかといふやうな、ひどい困苦を経て、終に今日あるに至つたといふことを話された、或は亞米利加に行き或は佛蘭西に行つて種々なる辛苦を経て経験を積み、又名古屋に歸つても色々なる試験を経て、僅かな一つの事でもその原因が分らないで、數ヶ月に亘つて眠食を忘れて苦心をされたといふやうな、實にその話の中には同情に堪へぬやうな事があります。私共は陶器に關しては何の考も無かつたが、今日お話を伺つて驚いた、皿一枚、コーヒー茶碗一つを造り上げるに就ても、そのやうに身體が衰えて病氣になつてしまふ程に考へて呉れた人があつて、さうして色々佳い物が出来て居るのである。それを考へるといふと、このギヤマンで持へたコップの一つにも、やはり之を製造する元には同じ苦心を重ねて居る人があることを思はなければならぬ。

物質の文明にもその通り、色々苦心が重なり重なりて今日の豊富なる文明が出来て居る。精神の文明も亦これに優るとも譲らないので、血と涙とを以て造り出されたものである。ニュートンが引力の理法を考へる爲めに、熱心凝つて血を吐いたといふことが書いてあるが、日蓮聖人も神聖なる教を覺り、人々に精神上の據り所を得せしめやうとして、清澄の山に於て熱心凝つて血を吐いたのは確かな事實である、左様に皆血を吐くまでに精神の文明、物質の文明に努力した人が幾千萬人あつて、それが集まり集まつて今日の如き文明が開かれたのである。又日本に取つて考へれば、斯ういふ小さな國が波風

の荒い世界の競争場裡に踏み倒されもせずして今日に至り、相當の地歩を占め得て、その國家の發達の中にお互が幸福を保全して居るといふには、容易ならぬ先人の苦心がある。

九、先帝の勸慮

第一 明治先帝が維新の宏業より四十五年の明治年間、眠食を忘れて御心配を下されて居るので、それは 先帝の御製に現はれて

夏の夜もねさめがちにぞ明しける

世のため思ふこと多くして

夏の夜は短かいから、ちよつと寝たら夜が明けて居るのである、その短かい夏の夜でも、度々眼がさめてゆつくり寝られぬ、ちよつと眠つたかと思へば眼があいてオチ／＼眠ることが出来ない、それは何故かといへばどうぞして日本の國家を立派にし、國民の幸福を増進しやうと思つて心配して居る爲めに、夏の夜もオチ／＼眠られぬといふことを仰せられて居る。一般人民は氷でも飲んで素つ裸になつてグ／＼寝る、夜が明けてお日様がカン／＼照つても眼を覺えずに軒を叩いて居るやうな者が随分澤山居つたであらうが、先帝は唯今の御製のやうに、世の爲め思ふこと多くして夏の夜もゆつくりお寝みにならなかつたといふことである。又

この春は梅鶯も忘れけり

民やすかれと思ふばかりに

春中に一通梅を見たいと思つたけれども、それも忘れて梅を見る暇もなかつたと仰せられて居ります、何故かといへば人民に安寧幸福を得せしめたいと考へ、政治上の用務が多くして、梅も鶯も忘れてしまつたと仰せられて居る。左様な御製は難へ切れぬほどある。さういふ風に 明治先帝が御心配を下さつた爲めに、この小さな日本が時まれも眠られもせずして、今は獨立を維持し來つたものである。

一〇、軍人の忠烈

又一方日清日露の戦争には、御承知の通り犠牲となつて屍を戰場に導いた人が幾萬人あるか分らない、可愛い、妻を返し可愛い、子供を捨て、さうして身は戰場の露と消えても、どうぞ日本の國家の前途を盛んならしめたい、諸君等をして幸福なる日本人たらしめたいといふ愛國の精神の爲めに、幾萬の忠勇義烈の軍人は身を國家に捧げて居るのである。

一一、高僧の遺業

その外ありとあらゆる方面を考へれば、宗教界にも我國には偉い人が續々出て居る、我が歴史を飾つて居る所の高僧碩徳といふものは、決して世界の國々に對して劣りはしない、行基菩薩、傳教大師、弘法大師、日蓮聖人、その他各宗の祖師、又それに續く學者といふものが輩出して、新様に津々浦々に佛教が弘まつて居るのは、皆道もない所を行つて教を弘めたのである。又唯だ教を弘むるのみでなく、佛教徒の手に依つて温泉が発見され、山道が拓かれ、橋なき所に橋を架け、あらゆる文明が開拓されたものである。日本が今日の地位を維持し、今日の文明を造つて居ると云ふものは、どの位多勢の人の血と涙と生命とに依つて築かれて居るかといふことを諸君がお考へになつたならば、實に容易なことでない、その多勢の犠牲の下に吾々は今日の幸福を享けて居るのであります。

一二、現代人の輕佻

それを能く考へもしないで「ナニ、過去の文明？そんなものは舊くさい」と言つて、何が舊くさいのか譯も分らないで、唯だ新しいといふやうな言葉に騙されて、さうして過去の文明を一概に呪ふといふ気分が起つて来ると云ふのは、それが不健全なる思想といふものである。過去の文明に對して十分なる尊敬を拂ひ、愛護の觀念を擧げて行くといふことは、吾々の祖先に對して、吾々の先人に對して拂ふべき所の當然の義務であります、自分の先祖、自分の先輩がさういふ風に命まで捨て、送り上げたる文明を、譯も分らず壊してかゝるといふやうなことは、確に間違つた精神であります。さうして過去の文明を愛して行く中に、それは如何に綺麗に造つた家でも、年代を経れば舊くもなり、又塵も溜るから、或は壁の上塗をしなればならぬとか、畳替へをしなればならぬといふ位のこととは起りませうけれども、非常に立派に出来て居る名古屋城なら名古屋城と云ふやうなものを、少し壁が汚なくなつたから塗替へるといふ位は宜いでせうけれども、「ナニ、あんなものは舊くさい、打壊してしまへ、焼いてしまへ」と言つて、偉大なる建造物を壊して見た所が、決して褒められたことではないのである。この日本の文明は三千年の永き歲月を経て送り上げたる偉大なる文明であるから、そんなに輕々しく之を罵るべきものではないからと思ふ。そこに積つた塵があるならば掃除をして、草が生へたならば草を抜いて、壁が汚れたら塗替へるといふ位の事は宜からうが、改造などと言つて見た所が、壁の塗替といふ位に考へないと、唯だ「改造ちや、打壊せ」と云ふばかりで、「あとはどういふやうに造るか、材木を持つて来て居るか」「材木もへちまもあるものか、何でも打壊せ」「それちや天幕でも張つて置くのか」「天幕もくそもあるものか、壊せ」といふやうなことになつてしまふ。

今日はさういふやうな無謀な運動が起つて居るから、諸君はどうぞ過去の文明に大切なるものが澤山あることを考へて、送りかへるならばそれは少しの部分であるといふことを了解せられなければならぬ。明治先帝の御製に

ひらけ行くときにいよ／＼仰がれぬ

ひじりの御代の高き教は

といふことがある、世が開けて行くからといつて捨てられないものは、聖人賢人が打立て、呉れた教、毀れまが開けて行つても益々光を放つものはその尊き教であると仰せられた。是は東洋人の忘れてならぬ事である、西洋は開けて行くと今までの教を變へてしまひ、學説を變へてしまひ、何もかも變へてしまふことをやる、それは元の建物が粗末であると、段段發達するに随つて、こんな工場はいかぬから打潰せ、こんな粗末なものぢやいかぬからモツと斯ういふやうに建てなほせといつて、工場の建物を造りかへるといふやうな事になる、けれども名古屋城のやうに元と／＼立派に出来て居る大きな建築物を、「こんなものは壊してしまへ、舊くさいから建て直せ」といふ必要はない、大建築といふものは飽までも保存しなければならぬ。東洋の文明はどの點を御覽になつても、過去の文明に偉大なものが存する。建造物に就て御覽になつても、奈良の大佛といふやうなものは、今日發達したる技術を以ても、あれだけの大佛を良い工合に拵へるといふことはちよつと出来ないでせう、或は大坂の四天王寺の塔の如き、千三百年を経て少しも變らぬといふやうな建築といふものは、今の建築家が皆手本にして居るものである、「あんな物は舊いから」と言つて、殊かにする者はない、やはり良き大工は我國の舊い時代の建築物などを見て廻つて、それを寫して拵へるといふことになつて、皆それを参考にして居る「あんな物は舊くさいから壊してしまへ」といふことになつたならば、寺一つ建てる手本も無くなる譯である。ちよつと見てもやはり日本の舊い時代のもの、即ち法隆寺の壁に描いてある畫などが一番善い物になつて居るのである、刀でも正宗とか村正といふやうな昔の名人の造つただけの刀を造るといふことは、今日ちよつと出来ない位に、日本は舊い文明に尊といふものを有する、今日傳教大師や弘法大師や日蓮聖人のやうな坊さんがゴッ／＼居るかといへば、さういふ偉い坊さんは一人も居らぬ譯であります。今新らしいといふ坊主は何をやり居るか、裸體畫に熱中したり、漁業會社を建てたり、淫賣婦と墮落をするやうなのはいくらも居るけれども、中々新らしいものが良いとばかりは考へられないのである。

一三、教化基本の動搖

左様な譯であるから我が過去の文明にあつた善い所を愛護して行かなければならぬ。それは人間の修養を讀み、人格を磨いて行く根本の教も、日本には世界第一のものが傳はつて居る。西洋あたりでは人格を造る本を何處に置いて居るかといふと、元と基督教の教に依つて居つたけれども、それは權威を失うて今日はマゴ／＼して居る、氣の毒な有様である、學問の方からは自我發展とかいふことを言ひ出した。初めは基督教の方で人間には罪があるといふ、さうして頭から水を掛けて罪を洗つて貰ふ、キリストが十字架に上つて吾等の罪に代り給うたといつて、胸に十字を掲げてアーメンと言ふ、それで罪を淨めて貰ふといふやうなことで済んで居つたのである。所が一方學問の方から「罪々といふやうなことを言ふな、人間は獨立自尊である、えらい者だ」といふやうに言ひ出して來て、「吾々は罪の塊りでございます、どうぞ吾等を憫れみ給へ」……そんな事はいかぬといふので、自我の觀念が學問の方から起つて、宗教の「罪の子をば淨め給へ」といふやうなことを打破つてしまつた。そこで多くの國民はどつちか附いたかといふと、基督教の罪の子だ、悔改め……そんな事は廢めてしまへと云ひ、到頭自我の思想が勝つた。所がその自我といふものが餘り磨いてない自我、我儘の自我、濁つた自我であるから、それが國と國との間には五ヶ年の大戦争となつて悲惨を極め、國內には勞働運動となつて喧嘩ばかりするやうな事になつて來て、どうにも斯うにも始末が付かなくなつて來たので、この頃では自我を少つと抑へなければならぬといふことになつて來た。この間英吉利から亞米利加に赴任した大使が、どうしても自我を抑へなければ、國際の關係も勞働問題も一切駄目ぢや、自我を突つ張れといふ事ばかり言つたんでは逆もいかぬといふことを、亞米利加に赴任した時の初めての演説にして居つた、是は餘程賢い人である、吾輩はその英吉利の大使の言つたやうな事はモウ早くから言つて居るが、併し英吉利人としてそこに氣の附いたのはえらいのである。日本人はそんな事は誰でも知つて居らんければならぬ、今頃英吉利の大使

の話聞いて「そんなものカナ」と思ふやうでは手後れぢや。然るに日本人が今頃眞似をして、自我を突つ張れといつてむやみに煽つてまくつて、腕まくりさせるやうな事をするのは舊い思想である、權が生えた思想である、今にして未ださういふことを言ふのは時勢おくれである、今日は自我を突つ張れなど言つて居るべき時勢ぢやない。さういふ譯で西洋の方では、少しは氣が附いて來たやうだけれども、未だ本當の人格を造る本が立たぬのである。

一四、教化基本の健存

東洋では人格を造る本の教がちゃんと保存されて、教育の勅語も之を造りかへなければならぬといふ必要もなければ、論語や孟子も改造しなければならぬといふ事もなければ、法華經も今更らしては困るといふやうな所もないのである、寧ろ法華經の事を知らん人が多いのは困るから、明晚から此寺で法華經の要文講義をするのである。嘘だと思ふならば來て聽いて御覽なさい、感心する事ばかりぢや、成程尤もな事ぢや、こんな事を三千年も前に言ふたは驚くべき事ぢやと、吃驚するやうなことばかりで、逆も法華經を造りかへやうなど言つて見た所が、及びはせぬ、嘘だと思ふならば諸君一つ造りかへて御覽なさい、俺の考へた方が法華經より宜からうといふやうな物を一つ書いて御覽なさい、逆も書けはしない。さういふ工合で人格を修養する根本の教といふものは、日本では權威を失うて居らぬ、西洋では權威を失つてしまつたものであるから造りかへなければならぬ、どうしたら宜からうといつてもがくばかりで、ワイ／＼言つて居る、それは無理のないことである。日本でも教育勅語が駄目になつた、法華經も反古になつてしまつた、論語や孟子も役に立たぬとなつて、何も精神の基礎がないといふことになつたら、それは實に大變だ、どうしたら宜いだらうといふことになるから、吾々も一養に飛出して、ソラ改造だ、大變だといつて騒ぐであらう。けれども歐羅巴が火事で焼け居るからといつて、日本で火事だ／＼といつて騒ぐことは要らぬ、日本には精神問題に火は附いて居らぬ、附いて居ると思ふのは夢を見て居るのぢや、眼に赤い紙でも貼ら

れて居るのぢや、「火事だ〜」……ハツと眼が明くと赤い紙を貼られて居るから、何でも赤く見える、気が附いて紙を剥せば何にもないと云ふやうなものぢや。日本に於て思想の問題に火事が起つたと言つて騒いで居る人間は、確に間違つて居る、眼に赤い紙を貼つて居る人達である。

一五、國家理想の卓越

尙ほその外に大事なことは、國の理想といふものを西洋では矢うて騒いで居る。何の爲めに國を作つて居つたか、今更ら分らぬやうになつてしまつた、一つの國が他國の物を奪つて来る、こつちからも行つて奪つて来るといふやうなことで喧嘩が始まつた、そこで「これはいかぬ、國といふものは團結して泥棒するものではなかつた」といふことになつた、「それぢや何の爲めにあるのだ」「サー何の爲めだらう」といつて今更ら吃驚して居る。左様な侵略を目的にした國家といふものがあつたものであるから、そこで獨逸の侵略主義を攻撃する、軍國主義を攻撃するといつてワイ／＼言つて居る。けれども日本は決してさういふ國ではない、神武天皇の國を建て給うた謂に於ても「天下を元宅する」といふことに依つて日本は出来て居る、世界に光を興へ宅を興へる爲めである、暗きに惱める者に光を興へ、途に彷徨へる者に宅を興へるといふ目的に依つて日本は出来て居る、それであるから「日本」と言つて居るのだ、泥棒をするといふ國であるならば、日本といふ名は合はないぢやないか、お日様が出たら泥棒は隠れてしまふ。日本は光を以て世界に輝むといふので、神様は天照太神を戴き、國の名前は日本と稱し、日の丸を以て國の旗印にして進んで居る國民である。泥棒を考へて居つた國がまごつて居るからといつて、日の丸の旗を持つて居る國民が一緒になつて「飛んだ事が出来た、これは國といふものは詰らぬ」といふやうな事を言ふのは、餘程の鈍間と言はなければならぬ。日本は今日この國の理想を變へる必要はない、殊に明治天皇が近く御出世になつて、國家の理想を明かになさり、國家の働きを明かにされて居るので、誤解して居る者が支那に對して日本の態度が

軍國的であるとか、西伯利に兵を出して居るのは野心があるとか言ふけれどもそれは悪口ぢや。日本が自己の獨立を保全し、又國家の任務を果たさうとするには、支那の問題に就てもどうしても優先權を認めしめねばならぬ、何も悪い事ではない。

一六、附和雷同を諷む

それを少し日本の國力を張つて行く場合に、直ぐ「軍國的ぢや〜」などと言ふのは、日本に對する悪口である。山東問題にしても、日本が何も野心を以て取つたといふ譯ではない、獨逸が占領して居つて、放任して置けば獨逸の勢力が支那に擴がつて、亞細亞の平和を擾亂せんとして居る、その獨逸を放逐したのは日本である、それを支那に遣付してやるといふに就て、何の野心があるか、そんな事を野心があるやうに支那人が言ふたり、亞米利加人が言ふたりするのは、日本を誹ひるといふものである。その尻馬に乗つて「日本は軍國的ぢや〜」と云はれると「成程さうぢや、これはいかぬ」といふやうな事を、往々労働者などは言ふけれども、そんな尻馬に乗る必要はない、日本の態度は公明正大である。朝鮮を併合したのも侵略ぢやと言ふけれども、決して侵略ではない、朝鮮は日本が保護の下に置かなかつたならば獨立の出来ぬ状態に居るので、放任して置けば疾に露西亞の方に侵略されたものである、さうなれば朝鮮が倒れるばかりでなく、日本の獨立を危うするは明白であるから、已むを得ず朝鮮を併合したのである、而も決して之を酷い扱いをしたのではない、朝鮮の李王家は日本の皇族に列して、優待に優待を加へて、近くは日本の皇族のお姫様を世子殿下に娶はして、永遠にその安寧幸福を保全すべくなされて居る、心得違ひの李瑒公があつて謀叛などを起しても、それでもそれを罪せずして寛大なる方法を以て、我が皇室は臨んで御居でなる、朝鮮人の不心得の者が叛亂を起しても、成べく罪人を少くする方針を執られて居る、尻馬に乗りて日本を攻撃するといふやうな事は、お互に諸君と共に慎しまなければならぬ、世の中は中々面倒なものだから、さうこつちが遠慮ばかりして、御無理御尤と言ふて居つては國は立たぬ、無論侵略でもなければ壓迫でもないけれども、支那に於ても支那人

がポイコットをするし、西伯利に於てもポイコットを喰はすし、濠洲に於てもポイコットをやるし、亞米利加に於ても日本人排斥をやるといふやうな場合で、この日本の發展を寄つて集つて身へやうとする場合には、さういふ屈從ばかりして居ることも出来ぬ、相當日本の地位を高め、亞細亞の平和を保全する爲めには、日本の勢力を張らうとするは當然である。だから詰らない事を言つて日本にケチを附けるやうな運動には、諸君等は賛成をせられぬやうに希望するのであります。

一七、國民性を守持せよ

斯様な譯で日本には善い所が澤山ある、富士の山も立派であるし、櫻の花も美しいし、色々日本には善い事があるので、それは幾ら人が悪口を言うても何と言つても、富士の山は立派な山である、櫻の花は美しい花である、お日様は毎朝日本を照して麗かなる光を放つてお居でになる。故に佛蘭西のポール、リシヤールと云ふ學者が、日本人に告げた言葉に、

旭日の輝く限り、大和魂を捨てな。櫻の花の咲く限り、大和魂を捨てな、

「數島の大和心を人間は、旭日に匂ふ山櫻花」といふ歌は覚えて居るだらう、旭日は毎朝日本を照し、櫻の花は毎春に咲いて居るのに、何故尊い大和心を造りかへんならぬといつてバタ／＼するのぢやと言つて、ポール、リシヤールが喰つて居る、櫻の花が咲かなくなつたら考へるが宜しい、お日様が出なくなつたら心配するが宜しいが、旭日に匂ふ山櫻花として侮へられた大和魂は、今日と雖も決して動かしてはならぬ。

國家の大事、或は教の大事、心の本を養ふ大切な事柄、舊い文明を愛護して次第に大成して行くといふ根本の觀念は、動かしてはいけません。さういふ考が一つ確かりと定まると、他の事はそれに依つて導かれるから心配はない、勞働運動が起つても、その根本さへ身へてあるならば、吾々は何も心配しない、少しの利害の爲めに根本まで動かして來るから、それは容易ならぬと思つて心配致して居るのである、賢明なる諸君は左様な誤解を持たないやうに、尙ほ大和魂を能く磨いて、どうぞ國家の爲めにも、諸君の爲めにも過たないやうに、一生涯を日出度く送つて置きたいと思ひます。(了)



佛教信仰の正統

本 多 日 生

第六 國を思ふの信仰

更に國を思ふの信仰と云ふことが、佛教正統の信仰である
と私は信じて居ります、或る人は佛教は世界的の教であり、
或は平等慈悲の教であるから、國といふやうな觀念は無かつ
たであらう、或はあつてもボンヤリして居つたであらう、こ
れは日本に來た爲めに日本の國家觀念に同化せられて、非國
家的の教が國家的の宗教に變形したのであらう、斯う考へて
居る人が段々あるやうである。或る基督教の有名な人などが

佛教は人類的の宗教であつたけれども、日本に來て國家主義
に適合して墮落したといふやうな事を言つて居る。併ながら
そんな人が墮落したとか變形したとか腰が抜けたとか言つて
も當てにはならぬ、何方が墮落して居るのか、何方が適合し
て居るのか分らぬ。それは日蓮聖人の言ふ通り口には税金が
出ない「舌の柔らかなる儘に」と言はれた通り、この舌とい
ふ物はどつちにでも動く、愈々終ひに閻魔さんに釘抜きで扱
まれた時には動かんけれども、扱まれる迄は自由に動くもの
であるから、墮落したとか變形したとか勝手な事を言ふので

ある。左様な事を何にも調べないで、殊に日本に長き歴史を有して居る佛教を批難すると云ふことは餘程考へなければならぬことである。竊ならぬに於て見た所が三十年も四十年も其處の家の爲めになつて来た嫁を、ケチを付けて放り出さうといふには、餘程その人格に缺點のある事を突き留めなければならぬ、それを悪口などを以て放り出すといふことは出来ないでせう。佛教は日本に渡つてから千三百七十餘年の歲月を経て、非常な功績を現はして居るのである、その佛教を批難するには、餘程鄭重なる吟味をしなければならぬ、果して佛教が國を思はない宗教であつたか否か、何處を調べてさういふ事を言ふのであるか。私は阿含經から之を證明しやうと思ふ。大乘の教には國家と云ふことが現はれて居らうけれども、小乗の阿含などにはそんな事は言はなかつたといふのが今日の普通人の見解で、坊さんでも直きそんな事を言ふが、自ら佛教の悪口などを云ふ坊さんは、逆路の罪人である。阿含を研究して見たら分かる、釋迦如來は至る所に斯う云ふ事を説いて居る、「一家の爲めには一身を忘れよ、一家全體の幸福の爲めには自己一人の幸福は犠牲にして親なり兄弟なりの

つても同じことである、夫婦喧嘩して居つたならば家が繁昌するといふことは、到底言へない。自分の頭腦の中でも、自分の考へが始終衝突して、東に行かうと思つたり西に行かうと思つたり、寝やうと思つたり、起きやうと思つたり、本を讀まうと思つたり、飯を食はうと思つたりと云ふやうに、自分の考へが衝突する人は、何も出来るものではない。一人にしても精神の統一、一家にしても家族の和合、社會にしても國家にしても、國民の大調和といふことを嘲けるほど愚なことではない。左様な愚論が今日は勃興して居る、そんな愚論を迎へる國家は直ちに災禍を受けるであらう、釋迦如來は第一人心の融合統一を守れと言はれた。それから大事なことは、國民が寄つて相談をしなければならぬと云ふ、丁度今日の合議制のやうに、少數の人間がやつてはいけないといふ事も仰せられて居る。それから宗教の信仰を無視したる時は、必ずその國に弊害が起るといふことも説かれて、七つの事柄を懇懇とお説きになつて居る。それは阿含經の始めから涅槃經の終り迄、繰返して釋尊が屢と説かれた大事の教である。それに就て有名な話がある、彼の阿闍世王といふ王様が、自分の

爲めには盡さなければならぬ、自分一個の爲めに家が破滅しても構はぬと云ふことは無いであらう。その通りで、一村の爲めには又一家の利害を犠牲にしなければならぬ、又國家の爲めには一村の利害を犠牲にしなければならぬといふことを、何時も釋迦如來は説かれて居る。さうして拔者といふ國に、釋迦如來が説教に行つた時、その國が盛んになるやうにしなければ、萬事駄目である、國家が繁榮せんければ、その内に住んで居る國民の幸福は得られない。故に先づ拔者の國の隆盛になるやうにしなければならぬと言つて、「國家不衰の法」といふものを七つお説きになつて居る。國が衰へないやうにするには、斯う云ふ風にならなければならぬといふことを説かれた、「國家不衰の七法」と稱するのは有名な事であつて、佛教徒が之を知らぬやうなことでは駄目である。第一に人心を共同一致せしめて、上下心を一にして大いに經綸を行はなくてはならぬ、唯だ徒らに今日のやうな、喧嘩をするのを以て文明が進歩すると云ふやうに考へて居るのは間違ひである、その喧嘩の頂上は遂にその國を破つてしまふ。民心が乖離してその國が榮えるといふことは無い、家の中で言

國は大きいし、王舍城といふ立派な都を有して居つたから、「ナー=拔者ナン」といふ小さな國は、攻めて奪つてしまへ」と云ふので、阿闍世王が自分の家來の者をして釋尊の所に尋ねにやつた、「拔者を討たうと思ふが如何でせうか」と。その時に釋迦如來が答へられたのは、「お前が國の大きいのを觀みにして、拔者を討たうとしてもそれは駄目である、俺が嘗て拔者の國に行つて國家不衰の七法といふものを十分に教へて来たから、攻めても駄目だ」と言はれた。そこで王の使が「七不衰の法といふのはどういふ事柄でございますか」と言つた時に、釋迦如來が今の七つをズツと擧げて、斯ういふ風に説いたといふ話をされた所が、その使が驚いて、「その一つを守つても容易にその國は衰へない、況んや七つを合せてやつて居るといふことでは、逆もいかぬと思ひます、その後の形勢は如何ですか」と尋ねたら、「この間阿難が行つて見て来た所では、この七箇條といふものは十分に實行して居るといふ報告を得て居るから、逆も駄目だらう」と言はれた。それは仕方がないと云ふので、諦めて戦争をしなかつたといふ事がある。國の事をお釋尊様が考へなかつたなどと云ふのは

その人達が能く佛教の事を考へないのである。何もお経などを調べないで、こんなものだらうと宜い加減のことを想像して言つて居るのである。

それはあらゆる事に現はれて居るが、大體佛法の教化の下には多くの國王が信者になつて居る、十六大國の王様を始め、大臣などが悉く信者になつて居る。佛教が若し國家を思はん教であつたならば、國王が信者に成る筈が無い、國王はその國家を治めて、その國の繁榮を圖る事を第一に考へて居るのである、それが悉く釋迦牟尼を奉戴して佛教徒になつて居るといふのは、佛法が即ち國家主義であるから、國王が來つて信者になつて居るのである。釋迦如來の信者中に國王は無かつたであらうか、國王は佛教に反對した事實があるか、決して左様な事は無い。基督の教の場合に於ては、國家の政權を持つて居る者との關係が、餘程面倒であつたやうである。後に羅馬の國家と基督教教會との關係は、遂に羅馬の國を滅したので、基督教と國家との關係は面倒であつたことが明らかであるけれども、釋迦の教は、その教が弘つた爲めに國家を滅ぼしたといふ事は一つも無い。

「先づ國家を祈つて、須く佛法を立つべし」といふやうに、國家觀念の秀でて居るのが日蓮聖人の教の特色である。これは釋尊の教へられたる正しき信仰を履んで、日蓮聖人が説かれるのである。であるから「安國論」を見ても、仁王經、最勝王經といふやうな四つのお経を引かれて「四經の文朗かなり」と言ひ、その經文を根據として立正安國論を書いて居られる。「經文には無いけれども日蓮が日本人だから焼直した」と、斯う云ふ風に佛教を焼直さんければいかぬと云ふやうな事は斷じて無い、さう云ふ事を想像して好い加減に、日蓮聖人が立派であつたから、佛教はボンヤリして居つたけれども、日蓮聖人に依つて國家的の佛教になつたと云ふやうな事を云ふ、それは唯だ日蓮聖人のみ有難く言はうとするから、さういふ事になるのであつて、左様な事を言つても日蓮聖人は決してお喜びなさらなと思ふ、その點は十分明らかにしなければならぬのである。

第七 惡と闘ふの信仰

それから大乘の教に進んで來れば、澤山國家の事を説いて居るので、第一に四恩の教といふものが一貫して現はれて、國王の恩を四つの大きな恩の中の一つに教へてある。さうして『守護國界主經』といふやうな、國を守ることを主として説いたお経もあり、『仁王經』といふお経もあり、それから『最勝王經』、『金光明經』等、何れも國を護る事の説いてあるお経である。日本に於ても傳教大師の時から仁王經を尊重されて居るし、大體聖德太子が佛教渡來の時に法華經を採つて「鎮護國家の妙典なり」と言はれて、この教を重んじたければ、日本の國家は危しとまで言つたものである。佛教に國家思想がないのに、日本に來て之を燒き直したのではない。今日でも佛教が旺盛になれば、益々國家觀念は強くなる、現に佛教を信する者にして、國家觀念を否定する者は無いのである。

その中に於ても殊に日蓮主義は、國家觀念の鮮かなる色彩を帯びた信仰を持つて居るので、唯だ深い觀念に依つて「死次には惡と闘ふの信仰」といふことが佛教の信仰の正統であらうと思ふ。佛教の信心が力の無いものであつて、唯だ自分だけが小さい聲でお経を讀んで居るといふやうなものであつたならば、到底十分の効果を世の中に現はすことは出来ない。他を利さうとするならば、其處に妨害があるから、その妨害を除かなければならぬ、國を護らうとすれば國を侵して來る妨害があるから、それと闘はなければならぬ。世の中には正義の前には邪がある、善の前には惡がある、正しき教の前には謬れる教が現はれて來る。永遠にこの人生は、自分の心にも正しき考へと謬れる考へとがある、それが働く時善い事と惡い事となる、其處で社會は善と惡とが永遠に存在する。故に善に力附け惡を肅清するといふ態度は、自分一人の上で言つても、善い考へを守り立て、惡い考へを撃退しなければならぬ。家の中に就ても善い事を盛んにして惡い事を直ぼして行く、社會にしても國家にしても、惡を肅清して善を盛んならしむるといふ態度が、宗教でも道德でも政治でも一切の根本である。唯だ面白半分によつて行けとか、兎に角打壞はして見たら、其處から何か芽が出るだらうとか云ふやうな事を

言つては駄目である。一切の事柄は能く迄も正義を本にして考へて行かなければならぬ。その場合に釋迦の教はどうであつたかと云ふと、唯だ自分一代深くして居れば、人は間違つて居つても宜しいと言つて、横を向いて念佛を唱へて居るやうな教かどうか、其處が大事な所である。今日佛教は随分日本に澤山の信者を持つて居るけれども、薩張り力が無い、或る宗旨は壁に向つて黙つて黙想して居る、一方は西に向つてナンマイダーと言つて居る、さういふ者は釋迦の教へではあるまいと思ふ。日蓮宗でも聲は大きいけれども、唯だ石炭箱を叩いてコリヤ〜と言つて見た所が、何の爲めにコリヤ〜といふのか分らんやうな、酔ばらい見たやうなものは駄目である、この打ち込む力といふものは何の爲めに出すか、能く迄も邪を倒し悪を懲して、正、善を押切らうといふ勇氣から現はれて來なければならぬものである。即ち戦ひの精神である、釋迦は最初教を説く時からその事を考へて居る、故に自ら法を説くにも、唯だ説法すると言はずして、御承知の通り「法輪を轉ずる」といふことは、釋尊が常に言つたことである。法輪を轉ずるといふのは轉輪聖王を理想して、轉輪聖

王は世の中の不正を懲し不義を懲して、正義の力を以て世の平和を圖る所の理想的の王様であるが、その懲つたものを打碎く爲に、轉輪聖王の徳として輪寶といふものがある。日本では不動さんの紋だと言つて居るが、不動さんに紋などは無い、あれは成田の不動の所に輪寶の紋がついて居るものだから、それを不動さんの紋だと言ひ出したのであるが、輪があつてその周圍に劍が附いて居る、輪では十四五指いてあるけれども、本當は千あるといふのである、金剛の劍が一つの輪の周圍に千附いて居つて、さうして之がビユーツと通つて飛んで行くのである、別にこつちから機械をかける譯でもないけれども、轉輪聖王の徳の爲めにこれがビユーツと通つて行く、一つの輪寶があれば向ふに敵が何萬人居らうが、忽ちこの輪寶に依つて打破つてしまふ。さういふものが輪寶の前に立つといふことを轉輪聖王の徳として説明されて居る。さうして戦ひに讃歌を奏する時分には、これが輪王の頭の上に昇つて、輪王の住んで御座る屋根の上には、何時もこれが光つて居る。日本の十六の菊の紋なども、やはりこの理想の劍を少し柔らげたやうな思想であらうと思ふ。それは轉輪聖王の徳

から出て居るのであるか、釋迦は教を説くことを「法輪を轉ずる」と言はれた、我が教の前に現はれたる邪なる者は、みな打碎くべしとの意である、當時の教としては婆羅門の邪教を打碎き、人の心の中に於ては煩惱、惡逆の精神を打碎き、社會に於ては謬れる習慣を打破つて、社會を改善し宗教を改善し、政治を改善し、人心を改善して、非常な新しき文明を打立てられたのが釋迦の法輪を輪じた力である、故に自ら法を説く事を或は獅子吼するとも言つて居る、佛弟子は獅子を理想せよと言つて、その話は獅子が吼へる事に譬へて居る、今日でも能く獅子吼といふことを言ふが、これは釋迦如來の言つたことである。獅子の吼く聲は日本人には餘り分らんが、印度には澤山獅子が居つて、獅子が吼ればどんな動物でも慄へあがつてしまふのである。又他の動物は眠つて居る時でも、何か物音がすればビクッとするが、獅子ばかりは幾ら音をさせてもビクともせぬと云ふことを釋迦が言つて居る。上野の動物園に行つて檻を叩いて御覽なさい、獅子はビクともしない、愈々喧ましくなれば、眼を明いてウーッと唸る、さうして獅子の欠伸と言つて大きな欠伸を一つする、その欠伸

の仕方釋迦は非常に褒めて居る。同じ欠伸をすと言つても、途中で噛み殺してしまふやうな欠伸はいかん、宇宙を吞吐するやうな大きな欠伸をする、獅子の十相といふものを説いて、佛弟子は變るのでも欠伸をするのでも、皆獅子に倣へと言はれた。その位に勇往果敢の精神を釋迦は獎勵して居るのである。故にあの時代の習慣力の強い中に於て、印度は婆羅門の教に依つて國が開かれたと言つて居るのであるから、政治であらうが、道徳であらうが、宗教であらうが、社會の風俗習慣であらうが、すべて婆羅門に依つて支配されて居る、その中に一人立つて印度傳來の宗教、哲學、習慣といふものを打破したのである。到る所に奮闘して、都會といふ都會は悉く打破つて、それから田舎まで押かけて行つて、遂に拘尸那城など云ふのは、田舎も片田舎、唯だ相撲取ばかり其處から出るといふ所であるから、日本で言へば越後の山の中といふやうな所である、其處まで打込んで行つて、遂に小さな拘尸那城に於て涅槃されるので、大都會の征伐は終つたのである。釋尊一たび遊化し給ふ所、敵と雖も服せざる無しと言つて、終ひには釋尊が何處かに行かれるといふ風附がある

と、婆羅門の族が怖がつて、逆も表から議論することは出来
ない。何でも釋迦は風景の佳い所でなければ説教しないさう
だ」といふので、公園を壊はし、山の樹をぶち伐り、槍でも
何でも嫌ない物を撒いたり何かして、斯うして置けば釋迦は
来まい」と言つて、色々準備をして居る事が、涅槃經などに
説いてある。さういふ風に一人の釋迦が進化すれば、其處の
人民は悉く教化されてしまふ、實に偉大なる奮闘力を持つ
て居つたものである。私は釋迦如來の勇氣の強いのに驚歎す
る、佛弟子を戒めるのに、敵十萬、味方は一人、これに進撃
する場合に、敵十萬といふ聲を聞いて、驚いて進むことの出
来ないやうな者は直ちに破門する。途中まで攻撃しやうと進
んだけれども、段々近寄る程、敵は雲霞の如くに居る、これ
は自分が一人位行つても仕方が無いと、途中で腰を抜かして
しまふ奴、これも破門。愈々敵陣に入つたけれども、敵十萬
の爲めに身に傷を受けて敵陣に鎧れた者、これも破門。愈々
敵十萬の中に討入つて十萬人を斬り伏せて凱歌を奏する者に
して、正に佛弟子たる事を許すと言はれた。これは非常に無
理な事のやうであるけれども、言論思想の闘ひであるから、

十萬の婆羅門の居る中に行つて、一人そこに乘込んで、十萬
の婆羅門教徒を征服して、佛教徒に改宗せしめて歸つて来る
者にして、始めて佛弟子であるといふことを教へられたもの
である。實に闘ひの力は旺盛なものであつたので、今日日本
の或る佛教徒のやうに、坊主といふ者は大きい聲を出しては
いかぬとか、そんな下らぬことを言つて居るのは全廢しなけ
ればならぬ。勇往果敢の精神を以て、世の罪惡と闘ひ、邪説
と闘ひ、さうして之を打破つて凱歌を奏するといふ勇氣を笑
罵する信仰が、佛教信仰の正統である。

それから考へて来ると、日蓮聖人のやり方がどうだといふ
事になつて来る。日本の色々の宗旨の中に於ても、日蓮聖人
のやり方が、佛教信仰の正統を發揮して居るものである。彼
は旗を擧げるや先づ折伏の方針を立て、謬れる者は悉く
粉砕するといふことを、正々堂々主張して居る。政治の上に
於ても、北條を叱咤し、宗教の方に於ては舊來の謬れる
佛教徒を攻撃し、あらゆる方面に闘を挑んで、一人にして
總ての者と闘つて尙ほ屈しない、敵は多勢であるけれども、
彼所に押寄せ此處に押寄せ、遂に一人もなく攻め落して法王

の家人とすると言つて、諸乘一佛乘に歸せしめんければ止ま
ると言つて居る。敵は多数であるけれども必ずや之を打破つ
て見せる、一天四海必ず妙法に歸せしめると日蓮聖人は叫ん
で居る。實にその奮闘の勇氣は偉大なものである。これがよ
いので、何處までも謬つた者を打破つて行くといふ觀念がな
ければならぬ。今日の如く思想の上に於ても色々邪説横行の
時代であるから、正しき者は、自分さへ間違はなければ宜い
と言つて、おとなしい態度をして居つては駄目だらうと思ふ、
飽く迄も謬れる者が現はれた時には、此方もそれだけの元氣
を以て、攻撃的態度に出でなければならぬ。全體各國が過
激思想などに對しても、今頃までマゴ／＼して、今頃になつ
て亞米利加が之を放逐するなど云ふのは後れて居る。過激
派が露西亞を征服した時分に、ウイリソン大統領は祝電を送
つた。さうして今頃になつて亞米利加が過激派を放逐すると
いふやうな事は、非常な矛盾である。少しも前後一貫した頭
がない、ウイリソンはえらい／＼といふけれども、何もえら
い事はない。露西亞の過激派が露西亞を顛覆したならば、露
西亞一國に止まるものではない、必ずやその思想を世界に傳

播せんとすることは、過激主義の性質上當然の事である。然
るにそれが天下を奪つた時に祝電を贈つたのは、ついでこの間
の事である、それが果を成して自分の國に災禍を受けて、こ
の頃それを放逐すると云つてバタ／＼して居る、左様な狼狽
へた態度は駄目である。物は見込みをつけてやらなければな
らぬ。「それはどうも輿論だから、グラ／＼變るのは尤だ」な
どと云ふが、そんな輿論なれば輿論が悪いので、さういふ下
らない輿論の起らないやうに、輿論を教へ導いたら宜しい。
西比利亞に兵隊を出して置きながら、その兵隊を引上げると
云ふことでも、どういふ譯か知らんけれども、今頃譯もなく
寒いからと言つて引上げる位ならば、始めから出さぬが宜い
ぢやないか、出した以上は眼鼻をつけるとか、引くならば、
「斯く／＼」の譯であるからと、堂々とやらなければならぬ
少しもその態度に男らしい所も見上げた所も無いではない
か。さういふやうな事ではいかぬ、飽く迄もこの邪を打破つ
て行くに就ては、最初から見込みをつけてやつて行かなけれ
ばならぬ。あゝ云ふ惡逆なる過激精神といふものは、霜を履
んで堅氷いたる」とと東洋で言つた通り、その始めを慎しまな

ければならぬ、始め明けて通して譲歩して置いて、愈々手が附けられなくなつて仕方が無い時分に、ドタバタすると云ふのは、へば政治と言ふべきである。彼の過激主義の如き者は世界人類の公敵であるから、如何なる場合に、假令露西亞の一角に於て革命を起しても、その主義が宜しくないといふことはその時誰でも分かることである。それが分らずに一國を代表して祝電を贈るなどといふことは成つて居らぬ。總べて西洋の學者のやり方といふものは、それは輿論が變つたから仕方が無いといふ、そんな相場みたやうなグラグラ變る輿論が何になるか、一國の輿論といふものはそんな事を言つて居つては駄目である。若しも輿論全體が變るならば輿論全體に責任がある、亞米利加全體が甚だ暗愚なることを證明して居るのである。何故に過激派が天下を奪つた時に左様な日本に當てこするやうな事を言ふたか、世界は皆デモクラシーになつて、唯だ日本だけが何か邪魔物のやうな事を言つたけれども、それは甚だ宜しく無いことである。今日日本の國體の上から如何なるものが現はれて出るかは餘程大事なことである、眞に文明を愛するならばこの異つたる東洋の文明、殊に異つたる我國の國體の如きものは之を愛護してこの中から如何なる立派なものが出来上がるか、共に之を助けて東洋文明の

華を開かさうと兵力をせねばならぬ。我々日本人は西洋の文明の良い所は保存して、その花を開かすべく努力して居るではないか、西洋人に於ては東洋文明の價値を認識して、それを人類の爲めに培養するといふやうな考へを誰が持つて居るか。一も二も無く東洋を罵倒し、さうして間違つた説に失敗に終つて居るやうな事を擔ぎ廻はると云ふことは、實に思はざるの甚しきことである。先年ケゴール先生が來てそのやうな意味の事を言はれたが、やはり東洋人の先覺者だけあつて、ケゴール先生の言はれたことは良いと思ふ。東洋人はその東洋の文明に於て世界に與ふべきものがある」といふことを信じなければならぬと思ふ。

故日蓮聖人が折伏の事を思想言論の上に應用されたのは、今日の文明になつて見れば一層切實に有がたいことと思ふのである。纏つた思想の撃滅の爲めには、飽く迄もこの邪を打倒して正義を立てる所の宗教でなくてはならぬ、佛教は決して悲觀厭世的のものではない、日蓮の教ゆるが如く飽く迄も正義を打倒する爲めには雄大な力を現はして行くべきである。釋尊然り、日蓮然り、これ我々佛教徒の信仰の模範である。あとの下らぬ坊主や學者などの説を聞く必要はない、手本は之を釋尊に求め、日蓮に求めればよいと思ふ。(未完)

我等の準備

海軍中將 佐藤鐵太郎

然らば今日吾々が奮發して之に對しましてもモウ間に合ひますまいか、間に合はなければ是非もありませぬけれども、思想の變遷ナンといふものはちよつとの一轉換であります。能く考へて本當の事に思ひ當りさへすれば、如何なる事でも出来る、餘りに物を遠慮して居る必要は無い、物が出来ないと考へますと何事も出来ませぬけれども、出来ると考へると大抵の事は出来る。日蓮聖人は三十五歳の時に立正安國論をお書きになり、六十一歳で御入滅になりましたが、其の間奮闘に於ても、御志を達することは出来なかつたのであります、けれども其の磅礴たる意氣が同じく天地に磅礴しまして、今日まで日蓮聖人の風を慕うて起つ者はズツと絶えない、是は何時か必ず成功する。であるから時期の問題は暫く置きまして、志があつてそれに向つて奮闘致しましたな

らば、必ず成功する、出来さうもないといつて決してクヨクヨ思ふ必要はない。そこで日本國の大體は如何にして避けられるかといふことは、餘程考へなければならぬ問題であります。例へば日本國は今大病に罹つて居る、そんな有様であります、此の時に御醫者様は之をどうして治しませうか、病根はまア大抵分つた、それは不健全なる思想が病根であります。此の病氣を如何にして癒さうか、相當の診察をし、適當の投薬をして、お醫者様が根治療法をやる、それだけで宜しうございませうか。多くの世間の病人の経過を見ますといふと、病氣の方は段々宜しうございませうがどうも心臓が弱つて参りましたとか、腦に影響を及ぼしましたとか、或は衰弱症に變るゝ憂があるとかいつて、目前の症状の、病根でないものゝ爲めに癒れることがある。それと同じやうに、日本國

を此の大病から救ふには、根治療法も必要であります、無論それも無くてはなりません。がそれと同時に目前を救はなくてはならぬ。假令永遠にどうなるからといって、樂觀的に見て居れば宜しいと考へましても、若し明日か明後日に心臓の働きが悪くなるとか、或は虚脱に陥つて死ぬとかいふ事がありましたらならば、病氣を治してもモウ間に合はない、であるから目下の問題といふものは、非常に重要な問題であります。

私には此の點に就きまして一つの方針を確に有つて居ります、是は誰人も争ふことは出来ぬと思ひます。それは此の日本を永久に健全なる日本に致します爲めには、先づ小學兒童より精神の教育を一貫してやらなければならぬ、兒童の教育の缺陷は何より忌むべきことであります。是が同じ方針でズツと貫けば宜しいのですけれども、今の教育の有様はさうではない、——是も餘り立入るとやかましくございますから此邊で止めて置きますが、兎に角正しくない。又今の實際の社會の有様はどうであるか、是も小さな聲で言はなければなりません、現在大騒ぎして居る問題が色々あります、物價調節とかナンとか色々あります、是であります、此の現前の

問題は兎に角現前に應ずるだけにやらなければならぬ——是も深く遣入ると是こそ本當に儲られる騒ぎになりますから言ふことが出来ませぬが、兎に角此の二つに就いて研究しなければならぬ。日蓮聖人様は是れ位の事は六百六十年前にちゃんと御考へであります。今更申すまでもないことであります、詰り日蓮聖人様の教を今の世に翻譯して見ればそんなやうなものであります。

そこで今申した永久に日本を健全ならしむる爲めといふ意味の事を以て、今の世界の様子を見ますと、今の世界の様子は皆修羅の巷、餓鬼の有様である、世界の人類は矢張り皆皆餓鬼である、吾々も其の餓鬼の一部分であるかも知れませぬ。さうして彼の地獄の繪を見ますと、みんながお椀を出して争つて居りますが、丁度あれです、今の世の中はみんなが下さい／＼と言つて欲しがつて居る、呉れ／＼といふ人ばかりで「上げやう」ナンといふことは一つも無い、成たけやるまい、成たけ貰はうと考へる、此の精神を起すべき魔が今世界に蔓つて居る。さうしてデモクラシーとか、サンチカリズムとか、色々うまい事を言ひます、サンチカリズムといふ者

は非常に悪い事ですけれども、それまで或る人は推稱する者がある、色々事を言つて居りますけれども、要するに彼の餓鬼がお椀を出して居ると同じことで、欲しい／＼と言つて居る。國民の自覚を求めるナンと云つて、どういふ事を言うかといふと、「國民は自己の權利を主張して、うまい事をすることを考へなければならぬ、奴隷の生活をして居るのは何事であるか」と言ひますが、奴隷の生活ナンといふ事は考へるに及ばぬことであります。外國の惡口を言つて済ませぬけれども、獨立ナンといふ事の意味を外國の人間が言ふことが出来ませうか。斯く申すと生意氣な事を言ふと世界の人が仰しやるかも知れませぬけれども、何處の國の人間でも皆皆奴隷といふものにならなかつた者は無い、皆一遍は奴隷の生活を經て來て居る。一つの國が他の國を征服して、其處の人民を悉く奴隷にして酷い目に遇はせる、奴隷とは言はなくとも體の好い奴隷である、國は亡び、國民は悉く奴隷となつてしまふ、何處の國も皆それをやつて居る。だから其の奴隷の方に今度は反抗心が起つて、擦つたり揉んだりして國が何遍も亡びたり興つたりして居ります。日本人は日本國が出來て日

本國民として存在しましたから今日まで、一遍でも奴隷になつたことのない國民であります、最も獨立の意義の盛な國民であります、是は誰も争はれない。先刻も言ひました通り、秩序を尚び、服従を重んずる觀念から上下の區別があるといふのは、是は決して奴隷ではない。この頃能く獨立々々と云ひますけれども、世間の人間皆獨立ならざる者あらんやです、小さくて歩けない者、自分で飯を食ふことの出来ない者は獨立でないでせうけれども、凡そ人としては皆獨立である。けれども獨立といふものは孤立ではない、他の人と共に立つて居る其の間に聯絡が十分ありまして、自分ばかり勝手な事をするといふ意味ではない、大いに服従する所に大なる獨立がある。「國民の自覚」とかナンとか言ふのは、やはりお互ひ第々の事を考へての上で、自分ばかりではない、他と共に安樂に幸福にさうして温かき心を作りつゝ獨立といふ所に本當の獨立があり、本當の自覚もあるのであります。此の頃の思想は今申す通り自覚の叫びであるが如く、實は自迷の叫びであります、迷ひといふのはどういふものかと云へば、正しくない事に執着することが迷ひであります、人間の盡すべき

道、日本國民の最も尊ぶべき道を忘れて外の事を要求するのは迷ひであります。日本國民が悉く皆さういふやうな考を有つて居るならば、どうしても進歩の境遇を一度経なければぬ。

今申すやうに世界は儼然修羅の境遇に在るのであります。之を何時迄も此の儘にして置きましたならば、吾界の人はどれだけの苦みを受けざるでありませうか。日蓮聖人様が「實乗の一善に歸せよ」と仰せられて居りますが、それは何かといふと、本當の正しい、人間の守るべき、踐むべき道を知らしめて、ちやんと定まつたものを立てるといふことであります。朝から晩まで自分の権利ばかり主張して居るやうな有様では、何時になつても争ひの絶えることはない、何時になつても今日のやうな修羅の境遇、儼然の有様を脱することは出来ぬのであります。労働問題とかいつて亞米利加あたりで色々やりましたけれども、彼の有様を見ますと、悉く自己の要求を主張するといふのみで、自己の守るべき點といふ事に就て反省する者は極めて少い。日本國民は之に向つて救の道を起すのが一番大切な事でありす。

を得ない。然らば日本はどうかと云ふと、日本はさうではない、日本の國の起原は神承知の如く一家族が段々擴がつたものである、さうする間に外の國からも来て此の中に這入つて来て、段々今日のやうに擴がつて来た、其の這入つたのは西洋のやうに征服されて這入つて来たのではない、日本の様子を基つて、或は其の境遇柄として日本に這入つて同じ國民となつた、であるから何處までも初めの中心を失つて居らない。其の日本の思想の根柢は何であるかと云ふと、親子の關係である、總ての道徳は父子の關係から出来て居ります。何故かといふと、是は私が常に申して居ることでありすが、日本は慈悲と報恩の關係であつて、權利と義務の關係ではない、親の慈悲を子供が感じて、其の恩に報いるといふ温かい境遇であります。そこで慈悲と報恩といふ意味合で出来たものは温かい關係を成し、權利義務の關係で出来たものは冷たい境遇を造る、温かい境遇の所には幸福が伴ひ、冷たい所には不幸が伴ひます。一家といふものは温かくなくてはいかぬ、親子夫婦兄弟の間でも、權利義務の關係が這入り過ぎましたならば冷たいものになる、慈悲報恩といふ心持でお互に結びつ

それで今の西洋の思想は、悉く皆要求の思想——物を欲しがる思想である、それは無理もない。何故ならば西洋の國の成立は、他人同志が集つて國を成したのであります、随つてお互に自分の都合の好い事を望むのである、そこで西洋の思想の根柢は、權利義務の思想から成立つて居る。然し他人同志が集つて自分に都合の好い事をして居つては、喧嘩が治まらぬ、到底何事も出来ない、そこで義務の精神を養つて、權利と義務と兩方で抑へて眞直に立つやうにした、權利思想が発達すると同時に義務思想が同じやうに発達して、そこで始めて完全に立つて行けるのである。所が人間といふ者は、權利の思想は発達し易くて、義務の思想は発達し難いものである、であるから自然々々と權利の方に押されて、義務の方は成たけ務めたくなくなる、是は當然の話であります、そこで喧嘩が始まり、戦争が始まる。それでも其の本に確乎した土臺がありましたならば、未だどうにか立つて居ることが出来ませうけれども、此の土臺が無くて唯權利義務の思想で行つたならば、自然と權利ばかり発達して倒れてしまふ、是ではいけない。けれども西洋では本が他人同志であるから已む

いたならば、非常に温かい幸福なことになります。けれども權利義務といふ觀念も無ければ、唯慈悲報恩のみでは世の中は進歩しませぬ。人間の欲といふものは案外表の場合に於ては良いもので、勇猛は悪いものは決して人に呉れない、勇猛といふものは良いものである、欲があつて自己の發展を望むといふことの爲めに、段々進歩して行くのでありますから權利義務といふ觀念は必要なものであります。件ながら權利義務の觀念と雖も、慈悲報恩といふことを全く取去つたならば、今言ふ通り極めて落漠たるものであつて、世の中は一日も安全で居られない。此の二つが能く結びつく所に本當に善い世の中が現はれて来る、即ち慈悲報恩の觀念が土臺となつて初めて世の中は安全である。それであるから大體申して見ますと、世間の状態は慈悲報恩といふ心を土臺として、此の上に權利義務なるものが段々繁茂するならば、幾ら繁茂しても宜い、慈悲報恩といふ土臺の上ならば、權利義務は幾ら発達しても宜い。所が西洋の思想は、遺憾ながら初めから權利義務ばかりで発達して居りますから、此の慈悲報恩といふことは非常に觀念が薄い、日本は今申した通り本から慈悲報

恩といふことを士豪として起つた所の國民で——即ち慈悲報恩の精華とも極致とも言ふべきものは忠孝であります。忠孝といふことを士豪として日本人の思想が總て先きに立つて居る、之を先きとして總ての事は成立して居る。此の頃は忠孝ナンといふことは舊い思想だナンと言ひますけれども、焉ぞ知らん、權利義務ナンといふことに囚はれて居る人に對しましては、日本の忠孝の議論は最も新しい議論と謂はなければならぬ。何故ならば、西洋人の餘り考へて居らない思想であるから……此の頃日本人は西洋人の言ふ事は皆新しいと思つて、何でも珍らしさうに言ひますけれども、それならば西洋人は日本のものを見たら珍らしく考へ、新しく考へるであらうと思ふ、今の新しい思想ナンといふものは何も値打の無いことである。日本人は此の慈悲報恩の士豪から起つた國民でありますから、此の思想を以つて世界の人類を救つて掛らなければならぬ、慈悲報恩の考を以つて世界の人類を救ふのが、日本國の天職であるといふ自覺に立たなければならぬ「立正安國」の「正」の字は、日本人の考へて居る此の思想である、此の慈悲報恩の思想を天下に打立て、世界の人類

を温かい境遇に導いてやるといふ思想を以つて日本人は起たなければならぬ、今日最も必要な事はそれである。今日は労働問題の九時間とか十時間とか、色々の事を言つて騒いで居りますけれども、それは皆枝葉の問題である、權利義務の争ひであつて根本を知らない。どうしても日本人は此の慈悲と報恩といふことを本として、之を以つて世界の人類に教へて掛らなければならぬ。日蓮聖人様が立正安國論を唱へられた千九百二十年を、西曆の千九百二十年に移して、今日は日蓮聖人が日本國內に立正安國論を唱へられた如くに、我が日蓮の徒は世界に向つて立正安國を唱へなければならぬ。世界に向つての立正安國とは、今申す如くに、慈悲報恩といふ觀念を深くするといふ正しい教を立て、それを以つて世界の人類を安んじなければならぬと思ふのであります。さうするには日本人自らも先づそれなくてはならぬ。先刻申した兒童の教育といふやうな事も、下から上までズと一貫した教育といふのは、此の慈悲報恩の教育であります。即ち忠孝の教育であります。能く私が申します通り、忠孝といふものは慈悲報恩の心から出るものであつて、權利義務の考

から出て来るものではない。此の忠孝といふものは我が國體の精華にして教育の淵源であると、明治天皇陛下が仰せられましたことは、實に千古の鐵案であります。吾々は無論之を守らなければならぬと同時に、世界の人をして之を知らしめたいといふ、慈悲の心を以つて日本國が起たなければ、此の世界の大亂に伴つた所の我國の大災難に對して、我國の天職を盡し、我國の存在を確めるといふ途が無からうと思ひます。それを忘れて向ふの意見にのみ従つて、唯ワイ／＼朝から晩まで騒いで居りましたならば如何でありますか。

茲に我等の準備が要るのであります。私は年寄のことを言ふではありません、年寄は失敬ながらモウ既往の人であります、過去現在未來といふ三つに分けて考へて見ますと、年寄は過去の人である、私もモウゾ／＼過去の人である、今は未だ現役であるが故に現在の人であるけれども、豫備になつたら總て過去の人になるであります。お爺さん方もお居でのやうですが、お爺さんはやはりお爺さんらしく、過去の人といふ考で、餘りやかましい事を言はないで、實際働いて居る人にやらせるが宜い。それと同時に又青年學生もさう

であります、未だ世の中に立たない、自己の修養をして居る人は、又餘り口を出さぬが宜い、現代は現代の人に委すべきである、未來の人は未來の現代に處して誤らぬやうに準備をしなければならぬのであります。それを考へないで未來を忘れてしまつて唯現在の事に熱中して騒ぐやうな事ならば、其の人情が自分の現代といふ時になつたならば必ず狼狽するに違ひない。學生諸君の惡口を言ふのではありませぬが、私は切にさう思ひます、學生諸君は未來の人である、未だ學んで居る人である、一生懸命になつて修養して居る人である、未だ實行家ではない、實行家でない者が實行家に向つて彼此れ言ふのは洵に困る。私は海軍の軍人であるから其の念が殊に深いのであります、自分が艦長として船橋の上立つて、非常に危険な、暗礁などのある海を航海しながら、「主舵イ、取舵イ」とやつて居る、是は現在の人です、其の時に未だ軍人になりかけの候補生が少尉が勝手に「艦長、それは危うございます、主舵ではいけません、取舵にして下さい」と言つて騒いだらどうです、そんな事ではきつと暗礁に乗上げてしまふに違ひない。假令艦長がまづとも仕方がない、ピク

ビクしながらも観念して見て居るといふ勇氣が無くてはならぬ、そんな候補生が後日艦長になつたらどうですか、必ずヒヨロ／＼の奴で何も出来はしませぬ。假令危険な事になると考へても、チツと忍んで居るといふ位の勇氣のある青年でなければ、後來の日本といふものは危いものである。何でも口を出す——今日も上野公園の邊に、自動車に乗つて變な旗を翻へして、妙な學生の帽子を被つてピラなどを撒いて居る人も大分あるやうであります、餘計なことではありません。それは現在を助ける位地に居つたならば——軍艦で言へば艦長の次の司令位の人ならば、艦長が「主舵イ」と言つた時に、「艦長、主舵と言はれたけれどもこつちに變なものがあるよ、眞直で宜くはないかネ」と言ふのは宜しい、其位事は言つて宜しいけれども、下の候補生や、少尉がワイ／＼言ふのはいかぬ。言ふべき位地の人と言ふても宜しい、現代の人であつたならば現代に對して相當の責任を有つて居りますから、是は相當の事は言うて宜しい、唯當局にのみ委して置いて、自分は我関せず焉と居眠りして居れと云ふのではない。けれども艦長などは能く此れ言ふものぢやない、我等の準備はそ

に依るのであります。人の講義を聞いて注入的の學問をして居る時から、赤い旗や白い旗を想つて、騒ぎ廻るといふやうなことでは、後來洵に思ひやられる、さういふ人は幾歳になつてもビク／＼する人でありませぬ。それは今の國情を憂へてする事とすれば、悪いとも言へんけれども、我慢の無い人である。そんな事では準備は整ひませぬ、準備といふものは餘程根強い心持で行かなければならぬものである。日本國の準備としても、何處の國と戰ふをするかも知れぬからといつて、急に軍艦を増す……それは目前の準備である、決して永遠の準備ではない。永遠の準備といふものは、日本人が如何にして世界に立つか、日本人は如何にして世界の人類を救つてやるか、それと共に日本人は今日の如き立場に向つて如何にして舉國一致の力を籠めて進むべきかといふ、其の準備が本當の準備であります。

段々申せば限りもないことではありますが、今のやうな意味合の事が「我等の準備」といふ題を出した所以でありまして、之を挿挿んで申しますれば、吾々の一生は準備を以つて終始しなければならぬ、吾々の一生の間に成功といふことを望ん

ここに在る、彼等は本當の準備を忘れて居る。

斯う申すと、明治維新の時には書生が主に働いて居るぢやないかと言ふ人がありますが、彼の時の書生は今の書生と違ひます、彼の書生は何も學問して居る譯ではない、既に學問して各々自分を得たと思つて居る人である、西郷隆盛でも、木戸孝允でも、大久保利通でも、大村益三郎でも、愛國の念が燃えると同時に、國を治めることに就ての覺悟のあつた人間である、今のやうに「是は何です、教へて下さい」といつて、詰らぬ學者の理屈を聞いて居るやうなヨボ學生ではない、年は若くともちやんと國士を以つて自ら任ずる所の學問をした人である、それを同様に考へてはいけない。それは人に依れば二十歳で總理大臣になつた人もある、諸葛孔明の如きは赤壁の戰をやつた時は、一説に依れば二十五歳、一説に依れば二十八歳である、ナポレオンも初めて第一統領になつたのは三十一歳か三十二歳であります、豊臣秀吉が京都の禁裡の御守護を承つた時も三十一歳位であります、又眞偽は知りませぬが加藤清正が肥後の熊本に封ぜられた時は二十八歳といふ話であります。それは年齢の如何ではない、境遇

ではないかぬ。尤も成功がそれが爲て準備でありますから、世の所謂成功を望んではいかぬといふ意味ではありませぬが、此の一生は無限の生命を舞すべき準備である、此の世の中で十分に舞いた事をして置くといふことは、不滅の生命に舞きを興へるのである、不滅の生命を舞かす爲めには、此の世にある時に舞いた準備をしなければならぬ、死ぬまで一日も怠らず準備に盡力しなければならぬ、此の意味に於て「準備」といふことを能く考へて見なければならぬ。さうして吾々日本國民としての準備は如何といふことになりまして、日本國民といふものは人と違ひまして、永久に存在して居るものであるから、是は成功といふことは必ずあるべきものである、けれどもそんな事を言ふ必要はない。今日は兎に角準備の時である、殊に世界大亂の後を承けた大なる混亂、紛糾、何とも言ふことの出来ないやうな、こんがらがつた時、將に大難の來るべきやうな状況に在る日本は、如何に準備すべきか。此の準備は唯其の大難に對するのみの準備ではないかぬ、日蓮聖人が蒙古から襲來して來る兵力に對してそれを恐

何處に砲臺を築かなければならぬと言はれたでありませうが、それを言はないで、永遠に動かない所の大基礎を打立てる「立正安國」といふことを叫ばれた如く、今日の日本人も本能く我國の立場を考へて、如何なる見地に立つて世界の人類を指導して行くべきかといふ、大なる目的に向つて進まなければならぬ、斯ういふ事を申し上げたいと思つたに過ぎないのであります。

それで「準備」と云ひました所が、兎に角今日は其の實行の時であり、空論の時ではない、論議の時ではない、實行の時であります。日本が今日まで二千何百年練りに練つた思想を實行すべき時であります。兎角人といふものは國家の魂を養ひ、美しいもので、何となく良く見えるけれども、能く自分を考へて見ると、自分の家の御馳走の方が餘程良いといふことは有り勝ちのものである。日本もさうでありまして、外來の思想が如何にも新しく輪奐の美を盡して居るやうでありますけれども、日本本來の思想が更に崇高にして、更に合理的で、更に偉大なるものであるといふことを省みたらば、どうしても日本の音に歸らなければならぬ、少くとも日蓮宗

人の言はれたやうな見地に立たなければならぬと考へるのであります。餘り長くなるやうでありますから、今日は是で筆を蒙ります。(完)

西宮日蓮主義研究会

△五月八日午後一時より同地稅務所樓上に於て講演會開催。「開會の辭」三時稅務署長、「五綱と三秘」熊井特命右教師。聴衆會員約百六十名。

△同月廿三日午後二時より同所に於て開會。「四思鈔講述」熊井本光師。講演後署長及署員の感想演説あり。五時半解散、聴衆約七十名。

御影日蓮主義青年會

△五月八日午後七時より講演會開催。「如說修行鈔講述」熊井本光師。「日蓮上人の情懷」會員田邊氏。來會者四十五名。

△同廿四日午後七時より青年會事務所に於て研究會開催。「兄弟鈔」熊井本光師「所感」三井三吾氏。聴衆者四十名。講演後會の發展に關したの決議をなせり。

一、御影町の綠日(月六回)に會員の隨力演説を試むる事
二、神戸市に於ける本多總稅院下の法華經要文講義の準備に能ふ限りの盡力をなすこと 以上

日本國の使命

陸軍少將 野澤 悌 吾

斯の如く今日迄三千年の間、吾々の祖先が築き上げた文明の中には、祖先の血といふものが流れて居り、涙が流れて居り、肉の斷片が流れて居り、骨の斷片が混つて居るのである。私は嘗て今日の日本の陸軍といふものゝ發達して來た根本の歴史を見まして、先人の非常に困苦せられた事蹟に感奮したことがあります。それは高島秋帆といふ人があつた、これは蘭學者で始めは極く詰らない役に就いて居つて、長崎奉行の奥力を勤めて居つた。併ながら識見の高い人格の高潔な餘程えらい人で、國を思ふの至誠といふものが満ち充ちて居つた人である。この人が日本の當時の世界的地位、並に物質文明の内容を見まして「是は到底斯ういふ事をして居つてはいかぬ、先づ軍事の方面から先きに改造して行かなければならぬ、今迄の種々の種刀といふものは捨て、しまつて、歐羅

巴の兵式に依つて訓練して行かなければ逆も駄目である。將來彼等と共に鎗を削つて争はなければならぬ場合が出來て來るが、その時分に今のやうな有様で行つたならば、必ず負けるであらうから、之は速かに改造しなければならぬ」といふ事に気がついて、さうして子弟を集めて練兵場を設け、砲術を教へ、色々軍事の研究をやつて居つた。所が當時彼を憎む者があつて、時の政府の者に賄賂を使つて之れを、陥れやうとした爲めに、とうとう獄に繋がれた。その時の罪状はどうであるかといふと「外國に密賣をした」といふ苦發に依つて捕へて來たのであるが、何しろ非常に人間が高潔なお方でありますから、色々調べて見るけれども、罪状が一向明らかでない、それは事實無根だといふ事になつて、之れを苦發した者の一人は首を斬られ、一人は流し者にされて居る。併ながら

「これがどうも私共今ちよつと分らぬ所でありますが、秋帆先生は無罪で十一年間も牢に入れられて居つた。さうするとこの秋帆先生の弟子の江川太郎左衛門、即ち江川坦庵先生これが非常に師匠思ひの方でありました、先生の難を救はんが爲めに、一日として心を碎かない日は無かつた。始終政府に行つて秋帆先生は決してさういふ罪を犯す人でないといふ事を辯明をし、或はその許されんことを嘆願をし、涙を流して師匠を救はん事を求めた。結局十一年目になつて、始めて坦庵先生の眞心が届いて、遂に秋帆先生は獄を出て、夜分坦庵先生の宅に運ばれた。入獄をしたのが四十六歳の時で、出獄をした時は五十六歳で、最早や老齢になつて居る。而かも十一年の間牢の中居て坐つた儘で居つた、その時分の牢といふものは餘程酷いものであつたから、健康は悉く衰へてしまつた、歩くと言つても本當には歩けない、ヒョロ／＼と歩く。さういふ状態になつて坦庵先生の所に到着をされた。坦庵先生は之れを上座に請じて、手を突いて「洵にこの十一年の間の御在獄の事、嗚ぞ御無念であつたでありませう、併し今日幸に晴天白日の身と成られて、茲に再び拜顔を得る

間に於て君が子弟を教育して行つた、この日本の軍事の進歩の状況、是非見たいといふ考へである」と言つた。「それは御尤な事でございます、併しあなたは非常に御疲勞になつて居らつしやいますから、先づ此處當分御休息になつては如何でありますか。今は盛夏であつて、炎天燒くが如き有様である、朝と雖も戶外に出れば、日が燦々くやうな暑さでありますから、もう暫く御休養を願ひたい」と言つた。けれども「いや、そんなに疲れては居らぬから是非見せて貰ひたい」と言つて居る中に、邸外に於て遙かに號令の聲が聞える、先生は踏みしめて立上つて、柱につかまつて背延びをして門の外を覗いて見られた。その時の風貌といふものは、眼光炯々として非常な熱心な態度で、この人が五十六歳の老齡で、而かも十一年間牢獄に繋がれて居つた人とはどうしても見えなかつた。その國を思ふの至誠が透つて居る状態を見て、坦庵先生も最早や止めることは出来ない。「左程に御覽にならうといふことであれば御案内を致しませう、却つて齒を散ぜられる爲めに宜いかも知れませぬ」と云ふので、手を引いて直ぐ門外の練兵場に行つて、其處で練兵を見た。丁度

といふ事は、私共非常に喜ばしい事でありませう」と言つて且つ慰め且つ勞つて居つた。秋帆先生は惘然として言はれるには「自分が最初獄に投ぜられた時分には、密賣をしたといふ事の嫌疑であつたので、非常に心を苦しめた。若しこの罪を洗ふことが出来ずして自分が死んだならば、末代に自分の汚名を洗すのであるから、非常に心を痛めたが、幸にして無罪であるといふ事が分つたので、冤罪が雪がれて、それから以來は十一年間別に精神の苦勞無しに牢獄の中に居つた。このよい月日の間お前の終始渝らない親切に對しては、何とも感謝の言葉が無い」と言つて、涙を流された。兎に角御疲勞でありませうから、今晚はお休みなさい」といふので、床を伸べて休ませたけれども、萬感こも／＼胸に集つて、秋帆先生はどうしても眠る事が出来ない。翌朝朝鶏鳴と共に起きて、顔を洗つて坦庵先生を呼んで「さて私は此處に三つの希望が實はあつたのである。一つはあなたに熊々と今迄の情誼に對してお禮を述べるといふ事と、もう一つは（今一寸名を忘れましたが）非常に自分の事を考へて呉れた役人がある、それに對して謝意を述べるといふ事、もう一つはこの十一年

その時は砲術の練習であつたので、燦々が如き炎天の中に立つて、その砲術の練習を熱心に見て居られた。さうして嘆息をして「實にどうも長足の進歩をしたものである、自分は斯く迄進歩して居らうとは思はなかつたが、あなたの盡力に依つて我が軍事界も斯の如く進歩したといふ事を今日見たのは非常な満足である。もうこの儘自分は死んでも宜い」と言つて聲を揚げて泣いた。時に江川先生も秋帆先生の赤誠に感じて「今日にして始めて貴師の御恩に酬ゆることが出来ましたでせうか」と言つて、喜んで是れも亦泣いた。師弟相共に其處に泣いて居るのを見て、練習をして居つた軍人も、誰一人として仰いで見る者が無かつたといふ事である。この精神が吾々の頭に傳はつて、私共青年の時代から今日に至る迄、軍事に従事して來て居る間に於て、この先人の血といふものが吾々の精神の中に流れて居つたのである。流れて居ればこそ日本の軍事といふものは、他の文明と比較して比較的長足の進歩を見た、歐羅巴に於ては術を以て勝たうとして居るのに、日本に於ては其處に精神といふものを加へて、術と精神と相俟つて、日清の戦争も行ひ、日露の戦争も行つて、外國

人が想像に及ばぬ所の戦捷を獲たのである。

又これも二三日前に讀んだ本の中に出て居る事で、非常に感じたのでありますが、土生玄碩といふ眼科のお医者さんがあつた。眼科の事を一生懸命研究して、大分腕も出来たので、大阪に行つて開業した所が、どうしても流行らない、で飯が食へないから夜は按摩の笛を買つて来てピイトロ〜吹きながら外を歩いて居つたので按摩玄碩と言はれた。一體按摩といふことは日本の人は大分やつて居るので、學者が按摩をやつた人は餘程多い、按摩といふものは笛一本買つて来れば直ぐ出来ることでありますから、一番やり易いと見えて、學者でやつて居る人が鑑定して見ると大分ある。この玄碩先生も按摩をやつて居つた、所がある機會に於て石英症といふ性來の盲があつた、十七歳になる子供であつたが、それに針を差して直ちに治療が効果を奏したといふ所から、あれは青凌扁鵲の生れ代りだといふので、一時に大阪で評判が高くなつて、それから名聲が盛んになつた、所謂漢法の眼科醫であつて、一方の大家でありましたが、研究心の非常に強い人であつて、西洋の眼科醫に就て骨を折つて研究した。當時歐羅巴のシー

ボルトといふ醫者が日本に參つて居つた、それは軍艦か何か來たのに乗つてゞも來ましたが、兎に角眼科の事に精しいといふので、自分の子供をやつて色々研究をさせた。さうするとそのシーボルトが、眼の中にさすと瞳孔の開く薬を持つて居る、その瞳孔を開く薬を使つたならば、針を差したり何かして治療するのに非常に容易である、それを是非貰つて來いといふので、さして見るけれどもどうも行く行かない。其處で息子さんが言ふには、「あなた一つ一週行つてシーボルトに會つて御覽になつたらどうですか」それでは行つて見よう」と云ふので、行つて色々話をした所が、それは分量が違ふのだらうと云つて、シーボルトがやつて見ると旨く効く、一處程これはどうも良い藥である、之れを若し日本に傳へたならば、日本の醫學も非常に進歩をし、日本人の非常な幸福である」といふ考へから、玄碩先生はシーボルトに色々な使ひ物などをして、自分の財産の全部を殆ど擲つて、シーボルトにも色々物を與へ、それから彼の友達にも與へなどして、義理揃めでその藥を教へて貰はうといふので、頻りに頼んだ。シーボルトもとう／＼義理にからまれて、斷るに途が無くな

つた。其處で彼は考へた、玄碩が着て居る葵の紋のついた紋服を呉れと言つたならば、彼は必ずこの要求を止めるであらう、紋服を呉れれば當時は國法に處せられて命が無くなるのであるから、あれを呉れと言つたならば思ひ止まるであらうと考へて、或る日玄碩が來て又藥を教へて呉れと言つた時に、「それでは教へて上げますが、あなたの紋服を下さい」と言つた。玄碩先生は暫く考へて居つたが、縦し自分は假令草葉の露と消えても、この藥が日本に傳はつたならば、日本人の幸福といふものは大變なものである、醫學上の貢獻といふものは大きなものである、自分の一身は顧る邊が無いと決心して、直ちに紋服を脱いで彼に與へた。シーボルトはまさか呉れはすまいと思つて居つたのに、其處に深く出したものであるから、仕方がなしにその瞳孔の開く薬の製法を教へた。家に歸つてやつて見ると果せる哉非常によく効く、和蘭の藥よりもつとよく効くといふので非常に喜んだと同時に彼は刑に處せられた。斯の如く物質上の文明であつても、吾々の先人が涙を流し血を吐いて築き上げた文明である。況んや精神上の文明に至つては、御承知の如く藤原氏が段

段政權を恣にして、皇室を蔑ろにし、自分の女を天子様の御后として上り、さうして自分の家から行つて居る后に皇太子が出来る事を頻りに頼ふ、これは人情である、其處までは人情であつて許すべき點があるけれども、遂に宗教の力を藉りて調伏を行ふに至つた。眞言の力を信りて護摩を焚いたり色々事をやつて、自分の家から入つて居る后には子供が出来るやうに、向ふの家から入つて居る后は既に懐妊したといふことであるが、これは流産をするやうにといふやうな調伏を行つた。これは非常な危険な思想である、宗教といふものも、根柢のぐらつて居る宗教であると、斯ういふ風に悪用されて行くやうになる。さういふ風に宗教の力を借りてやつて見たけれども、眞言秘密の法でも中々旨く行かない時がある。其處で遂にこれは單に佛法の力のみではいかぬ、どうしても人間の力を借らなければならぬといふので、源平といふやうな武士の勢力を自分の方に懐けてさうして、源平を手なづける事に依つてその目的を達して行つた。斯の如くして遂に政權が武門の手に移り、北條氏の時代に入つた時に當つては、最早や日本の思想といふものは非常な混亂状態にな

つて、天子様が鎌倉に於いて謀叛し給ふといふやうな事を言つて、國民が別に怪まないやうな時代が来た。この時に方つて奮然と立つてこの思想を廓清せんとされたお方が御承知の通り日蓮聖人である。如何なる國の歴史を見ましても、日本の歴史に於ては無論の事、或は山陽が「外史」を書き、水戸光圀卿が「大日本史」を著し、さうして尊王——皇室忠心主義を鼓吹されたとは云ふものゝ、表面に當時の幕府を攻撃したといふやうな事は殆ど無いのであります。然るに日蓮大聖人は立つて「日本始つてより謀叛の者二十六人、第二十五人は源頼朝である、第二十六人は北條義時である」と言ひ、或は「王の門守の六二疋候、源平これなり」——源氏、平氏、北條といふやうな者は、王家の門守の犬に過ぎない者であると言はれた。皇室が將軍家に對して謀叛をし給ふと云ふやうな事を唱へて怪しまないやうな思想を有つて居る時代の方つて、大義名分を明らかにして、堂々として進んで行かれた、それが爲めに遂に龍の口の頭の座にもお坐りになり、佐渡にも流されるやうな事になつた、あの一代の御奮闘、一代の御苦心といふものは、今日吾々が考へても殆ど人間の出来得べ

つて居るといふ事ならずイテ知らず、今日之れを彼等歐米の偏つたる思想と比較して見たならば、立派な思想である。その立派な思想を有つて居りながら滔々として社會主義化し、過激化して居る所の思想を吾々が看過して居るといふ事は、甚だ賄甲斐の無いことであると私は慨歎するのであります。法華經の中にも「衣裏の珠」といふ譬があります、一人の貧乏人があつた、友達の家に行つて泊つて酒を飲んで酔はらつて寝てしまつた。主人は他方に行かなければならぬので、この友達が困るだらうからと言つて無價の寶珠——殆ど幾らといふ價ひを言はれない程の立派な珠を衣の縫ひ目に入れてやつて居いて主人は出かけた。眼が醒めて見ると主人が居らないので、その男は又流浪して歩いて、あつちに行つては困り、此方に行つては困り、勞働者になり色々な事をしたけれども飯が食へないで、撲れ果てゝ居つた、所がその友人と再び邂逅した「お前はどうかして居るのか」イヤ、どうも非常に生活に苦んで、この通り踏々として居る「さうか、さういふ事に成らぬやうにと、俺がお前に無價の寶珠を衣の中にに入れて置いてやつたぢやないか、それを求めずに他を求めて

き業ではない。精神文明の方に至りましたは、日蓮聖人の如きは其の最も著しいものでございませうが、非常な御奮闘を以て思想の廓清を行はれた、その御精神といふものが傳はつて、遂に楠正成に移り、新田義貞に移つて、彼等は遂に建武中興の大業を翼賛し奉つて、一時に王政復古の世の中を來した。不幸にして足利尊氏といふ者が出て、又再び王權の式徴を歎するやうになりましたけれども、遂に徳川時代に至つてこの日蓮聖人の御思想といふものが、萬壽比丘尼、即ちお萬の方を通じて徳川光圀卿に傳はり、光圀卿が「大日本史」を著し、その「大日本史」といふものが今日の國體の眞意義を宣揚する所の中心思想となつて、遂に明治維新の大業を成して居るのであります。

吾々の先人の爲したる事蹟を見ますと、これ等は一二の例を取つたのでありますが、今日まで來て居る所の文明といふものは、精神文明であらうと物質文明であらうと、悉く先人の血の跡にあらざるは無し、悉く先人が肉を削り骨を碎いて成し遂げたものにあらざるは無しといふ事になるのであります。而かもその築き上げた所の精神文明なるものが曲

歩くと云ふ事は、何といふ愚かな事だ」と言つたといふ事がある。これは一つの譬でありますけれども、吾々はその如く衣裏に寶珠を持つて居る、而かも聖徳太子に始つて傳教大師を経て、遂に日蓮大聖人に至つて完成した所の立派な磨き上げたる珠を持つて居りながら、その珠を忘れて西洋の偏つたる思想を辿り、又國民同胞がそれを辿りつゝあるのを默過して居るといふことは眞に愚の至りであると言はなければならぬ。昔支那に卞和といふ百姓があつた、彼は楚の國の山に這入つて、さうして一個の白玉といふ未だ磨き上げない璧を見つけた。これは非常な立派な璧がこの中に這入つて居るといふので、楚の靈王に之れを獻じた。所が靈王は人をして鑑せしめた所が、これは璧にあらず石なりといふ事になつたので、怪しからん奴だと言つて左の足を斬つて刑に處した。靈王が崩じて武王が立つたので、卞和は又それを獻じたが、又「石なり」といふ判定を下されて、更に右の足を斬られた。武王が死んで文王が立つた、さうすると彼は毎日唯だ泣いて居る、さうして遂に涙盡きて次ぐに血を以てすると云つて、血を流して泣いて居つた。その時に「天下に刑を受け

て足を斬られた者は澤山あるのに、お前は何故一人さういふやうに悲んで泣くのか」と問はれた所が平和が言ふには「私は決して刑に處せられた事を泣くのではない、此處に私は尊い壁を持つて居るのに、之れを石と見られて居る、それを悲しむのである。もう一つは私は正しい正義の志を以て之れを献じたのに、詐りの人間である、詐欺の人間であると思はれて居る、それを私は悲しむのである」と言つた。其處で文王もその義に感じて、その壁を磨き上げて見た所が、遂に趙吏連城の壁となつたといふ事がありますが、吾々自身は非常な立派な壁を持つて居る、この壁を磨き上げて、健國の大理想に於て吾々の祖先が既に打立てられた如く、この立派な思想を中心にして先づ日本の文明を完成し、世界の人類を救つて行くと云ふことに向つて進まなければならぬ筈であるかと考へる、平和は唯だ一つの壁の爲めに足を斬られても、如何なる刑に處せられても、飽く迄もこの壁を壁として世に出さんが爲めに彼は一生を捧げて居る。吾々は世界の人類が今悉く畜生道に陥り、修羅道に陥り、非常な有様に陥りつつあるのを、笑つて之を看過するといふことは、非常な罪惡

であると私は信するのであります。この意味に於きまして私共日蓮主義者は、最早や單に小さな所に居つて教義を説き、理窟を述べて居る時代ではないと思ふ。どうしてもこの日蓮主義の信仰に生きて居る人達は、共に起つて身を以て活動すべき時期が來て居ると思ふ。日蓮大聖人が當時に於て範を吾々に示された如く、而かも二陣三陣と續いて進むべき教を垂れられた所に従つて私共は活動しなければ、眞に日蓮主義者として日蓮聖人に見ゆるの顔は無いと思ふ。どうしても奮然と起つべき時期が既に來て居る、通り過ぎつゝあるのである。私共は微力ながらこれから大いに奮闘する者であります、希くば諸君も、今日本多親下の非常に行き渡つたる御講演に依つて、諸君の頭にも現代の思想の非常に危険であり、この儘に到底捨て置けぬといふことが能く御了解になつた事と思ひます、希くば吾々と共に奮つてお立ちにならむことを切に希望致す次第であります。(完)



經 聖

無 我 の 謬 見

本 多 日 生

復次ニ迦葉ヨ、如シ士夫有ツテ大鷲野ヲ度リ、合群ノ鳥鳴ヲ聞ク、時ニ彼ノ士夫是ノ鳥聲ヲ思ヒ、謂ヘラク却賦有リト、異道ヨリ而モ去リ、空澤ノ中ニ入りテ虎狼ノ處ニ至リ、虎ノ爲ニ食ヘル。是ノ如ク迦葉ヨ、彼ノ當來世ノ比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷ハ、有我、無我ノ聲ニ於テ、有我ノ聲ヲ畏レ、大空斷見ニ入ツテ無我ヲ修習シ、是ノ如キ如來藏、諸佛常住ノ甚深ノ經典ニ於テ信樂ヲ生ゼズ。

(大法數經、正大藏第拾貳卷ノ貳)

この一段は如何にも痛快なので、壁に寄せて無我の病見を破し、實相觀の上に絶対の有我を説き、諸佛の常住、人格の實在を説いて、それを信樂しない者は、眞佛子に非すと説いてある。

要文の意味は、佛が迦葉に告げて仰せられるには、今壁を以て無我に囚はれ、有我を嫌つて、佛教は無我だ、無相だと云ふ者の非を説かば、こゝに一人の侍があつて、それが曠野原を旅行して居つた、所が群がれる多くの鳥ががや／＼鳴いて居るのを聞いて、その侍は聴病な奴で、あの聲は何であらうか、はアあの林の中に迫射が居るな、この道を進んで行つたならば、ひどい目に遭はされると思つて、恐れを懐いて異つた道から通れ去らうとして、道に迷つて間談々々して居るうちに日が暮れて、虎の居る處へ迷ひ込んで行つて、終に虎の爲に食はれてしまつた。後の世に於て佛教を奉ずる人達が、有我無我と云ふ事に就て議論の盛んなるに驚いて、是はどうも面倒な問題である、併しどうも佛教は無我である

と遠慮して、本来無一物だとか、無念無想だとか、無門闕だとか、そんな事ばかりが真理であると考へ、それが爲にこの大法鼓經に説くが如き、一切衆生に如来藏ありと云つて、四つの譬で説明したやうな事、それから隨つて諸佛は常住であり、佛性も佛陀も實在である事、是は法華經に於て云へば、二乗作佛と久遠實成である、この佛性論と本佛觀とを忘れて、無一物だ、無我だと云つて居るのは、恰度車快な侍が、異つた道の方に這入つて行つて虎に食はれたと同じ事であつて、有我的聲を畏れて斷見の空澤に陥る。斷見と云ふは、魂も佛もない、無佛無靈魂、虛無である、所謂唯物史觀であつて、今の過激派の思想の如きが斷見である。現在だけが勝負だと云ふやうな思想に陥つて、この深い經典の有我的義に對して信樂の心を生じないと云ふのである。佛教徒は經旨を熟し、思つて深く恐懼戒慎すべきである。



錄 雜

靈 夢

空はクツキリと暗れて居る、講堂の白壁は日光を受けて、強い光線を遠慮會釋なく反射する、晝になつたら暑くて堪るまい。昨夜は一晚中蚊の奴に虐められてまんぢりともしなかつた私は、まるで魔酔劑でも嗅がされた様に無暗に眠くなつて来る。眠たい眼を擦つて本を見た所で何が分るものかと思つたので、足を伸び〜と伸ばして横になれば、魂は夢路をグン〜と迫る。

ものゝ一時間も寝ただらう、不圖眼を覺すとサーサーと激しい風の音、ハツと思ふとたんに冷い風が颯然吹き込むでほつた私の頬を氣味悪く摩で〜行く。こいつは仕舞つたといきなり跳ね起きて空を見れば、どうだ、あれ程暗れ渡つて居た青空がいつの間にか眞黒になつて、大粒の雨が驟の様地面を叩きつけて居る。繁吹は遠慮なく縁

△各地の法華經英文講義 五月十二日四日市圖書館、一聽衆三百五十名△同十六日名古屋常徳寺、聽 名(主催者側の準備不完全なりし結果成績不良)。同十七日、同所、聽衆七百名。△同廿、廿一日京都妙満寺、各聽衆三百名△同廿三、廿四日大阪市、各聽衆六百名△同廿五、廿六日神戸市、各聽衆六百名△同廿七日明石市、聽衆五百名

△茂原教信 千葉縣茂原町に於て三月廿七日第三教區青年布教團主催の下に思想講演會開催、左の講演あり。

歐洲戰爭に依つて興へられたる教團

日 高 大 佐

現代文明の三大缺陷

野 澤 少 將

健全思想とは何ぞ

本 多 親 下

聽衆は同地方に於る知識階級の殆んど全部を網羅し、近來稀なる盛會なりき。

△京都に於ける開宗紀念日 四月廿八日は、末法萬年の闇を照破すべくいとも尊き聖日なるを以て、京都天晴會、護正會、主催の下に會員及有志者は午前四時新開八坂神社に集合それより將軍塚に登山し、遠く建長五年の往昔を回想しつゝ、旭日に向つて題目を力唱し了つて、村岡本量、有田安道、萩原信正、各師の熱辯を揮ふあり山上に本地の風光を顯現し、頗る有意義なる盛會なりき。(他數十回の活動報は略す)

昔人は露より濡れて御題目

眞 陽

若 林 不 比 等

先を濡らす、庭の掃の繁みが重さうに頂垂れて居るのを、ボシヤリ見詰めて居ると木戸口の方で何だか案内の聲がする。

「御免下さい」

雨の音に紛れてハツキリ聞き取れないが、確かに誰か来た様子だ、此の雨に來客でもなからうと耳を傾ければ、

又

「御願申します……………御免下さい……………」

確かに來客だ、おまけに女の聲だ、誰だらう此の雨に態々來るのは……………と思つたが兎に角急いで出て見るとミスボラシイ三拾代の女が、これも餘り身姿の良くない拾位の娘を連れてションボリ立つて居る。

「鳥渡御尋ね致しますがWさんは御宅にゐらつしやいませうか」

「ハイ Wは私ですがママ中へ御道りなすつて……雨が激く繁吹きますから……」

女は誘はれる儘に娘を連れて座敷に通つた。

時はもうかれこれ三時を過ぎただらう。新手の黒雲が疾風の様にやつて来て、内も外も眞闇になり重苦しい気分が一際加はる、篠つく雨がザーツと走り過ぎる、遠くでは雷が微かに鳴る、湿け方があまりに激しいので、急いで硝子戸を締め、仕舞へば室の内は夕霧が立ち籠めた様になつて、頭は無暗に重くなる、魂の抜け殻見たいな三人が茫然と座について互に黙つて眼を交す。

一體何處の女だらう？

といふ疑問が起つて来る、考へるが見當は更につかない大概〇〇の講話會で自分の感話でも聞いた女だらうと極め込むで、別に聞かうともしない、女は尙更黙つて居る。見詰めて居た眼が段々ポーツとして来て二人の姿が何だか陰鬱な氣流の中に融け込みそうになる。

女がヤツと口を切つた。

「突然御伺ひ致しまして、大變御邪魔を致します」

と言つた儘今更言ひ難くさうに俯向ひて居る。

「何の遠慮なんか要るもんですか、出来る丈御力になりますに……」

と無難作に言ひ退ければ女も漸く勢を得たらしい

「夫では御言葉に甘へて申上ます、宅も元は相應にやつて居りましたのですが、運悪くも主人が二年此の方病に罹りましてからといふもの、収入はなくなりますし、養生費は氣のひける程要りますし、僅か許りの財産も次第に減らして唯今ではもう二ヶ月保つか保たない程になりました、今迄女の細腕でつまらぬ内職を致して参りましたが澤山の子供を持つてはたしにもなりませんのです、自分が男でさへありますれば又なんとでもなりますものを……女の身の悲しさに獨りで途方に暮れて居ります、行末を案じますと、それからそれへと心配は心配を生むで、此頃ではまるで意氣地がなくなりました、仕事も手につきませず、夜もオチオチ眠れませず、身體は段々衰弱して参ります、病氣にでもならなければよいがと其ればつかり心配して居ります……私は縦ひ死んでも構ひませんが、せめ

「イーエ 少しも構ふ事はありません、御ゆつくりなすつて下さい」

「難有ふ御座います、實は先日〇〇講話會であなたの御講話を伺ひましてから、是非一度は御眼に懸つて、色々御話を伺ひたいと存じて居りましたのですが、日一日心配が殖えて如何にも我慢が出来なくなつたものですから、本日はなんでも早く御眼に懸つて、胸の苦しみを霽したいと存じて参つたので御座います」

何しろ此の雨にも隠げずにやつて来る位だ、餘つ程苦しさ餘つての上なんだらうと思つて女を見れば、憂はしげな眼が無性に自分の同情を喚ぶ、自分是一體涙を見たが最後どうしても涙の種を聞き出して遮二無二慰めてやらなければ濟まない氣性だから先づ尋ねた。

「どういふ御事情が存じませんが、御話でも伺ひましたら、又御力になる事も出来ませよ」

女は

「ハイ……」

では……

靜かに靜かに語つて来た彼女も、段々激して来たと思え此處迄語ると極度の興奮に入つて仕舞つた。涙が見る／＼眼に溢れる、頬に傳はる、果は唇が止め度もなく震ひ出す。

女はこんな事でどうなるかと袂を顔にあて、口を噛み締めるが、震へは仲々止らない。

「せめては病むだ主人を癒したい……小さな子供を育てねばと……」

そればかりに憤みます……

夜分等寝静つた頃凭んな事を思ひますと胸が張り裂ける様で御座います……

今はもう最後の日が眼に見えて苦しい思が心を亂します、ア、此の先三日も苦しめば、私はもう氣が狂ひます……

とオロオロ語る女のいちらしさを見ては、私の心は動かされずには居られなかつた、女が極度に激して居た時には私の感情も極度に昂奮して居た、あまりの悲痛さに見るに見兼ねて涙が、熱い血潮が血管に漲つて来て、心臓の呼動ばかり

タクタク響く

「此の亂れた心が静かにはならないものでせふか？」

此の弱い心が強くなりませうまいか？」

噫若し主人が逝りましたならば……………

咽び入る

頼る方とてはあなた許りです、どうぞ力になつて下さいませ……………御願で御座います……………」

言ひ終つて女は、ハタと打つ伏せば、嗚咽の聲がたまらなく私の腹を刺る、熱い涙がホロ／＼落ちて来て頭はガーンとする、沈黙

ア！此の俺にそんな力があるだらうか？

心——弱い心、人並以上弱い心

身體——弱い身體、おまけに片腕は利かない

駄目だ、到底駄目だ。

どうしてそんな事が俺に出来るものか！

ホーッと熱い嘆息が吐き出される。

「駄目です、私には出来ません、どうしてそんな力がありませふ……………自分一人すら持て餘して居ます

のに……………」

私は投げ出す様に言ひ放した、すばめられる様に胸を抱いて深い物思に沈まふとすれば、女は逃つて

「どうかそんな情ない事をおつしやらすに力になつて下さい、頼る人もない私を御見棄てにならずに」

「イエー／＼決してそんな積りではないのですけれども、無力な私にはどうしても出来ません……………」

私は眞個にあなたを救つて上げたい、あなたの燃へ狂ふ御心を沈めて上げたい、そしてあなたに安心を與へねばならぬと思ふ。あなたに確信を與へねばならぬと思ふ。あなたの御主人の病氣も癒して上げて昔のまどやかな生活に歸して上げたい。

「どうかして」と其の願の切なだけに私はほんとうに苦しい良心に責められる、あなたは主義に似合はぬ男だと思はれるのでせふが、私は思はれても仕方がない、これが私の眞實の叫なのだから、世間にはいゝ加減な胡麻化しを言つて通す人もあります。然し私にはそれが出来ないのです。私は眞底あなたを救ひたいのだ、あなたの眞心を貫かして最

後の勝利を祝つて上げたいのだ、其の考への眞面目な丈に私には出来ないといふのです、どうか悪く思つて下さるな、許して戴きたい。」

自分の腹のドン底を打ち明けて、幾分なりとも了解を得ようと努めたが、女は無言で俯向いて居る許り。

「あなた迄が御見棄てになつては、私はもう生きて居る甲斐も御座いません……………私が居なくなつたら病

人は餓ゑ死にするのでせふ、子供は路頭に迷はねばならぬ、精も根も盡き果てゝる今、どうしてオメ／＼生きて行けやうか……………」

半は自分に訴へる様に半ば絶望の口調で叫ぶ、今迄自分の立場にばかり居た私の意識は今度は女の立場に立つて考へ始めた。無謀な自決を想像する、女を失つた一家の悲惨な光景も浮ぶ、其の断末魔の悲劇を思ふては、最早や自分の事などは考へる餘地がなくなつて、全身の血潮が急に男性的な波を打つて廻り始める、「俺も男だ」といふ力強さが胸を衝いて起つて来る。何處にか俺だつて女に安心を與へる力位は蓄むで居るぞツと思ふ、右腕が急にムツ／＼と力が滲入つて来て、仕

舞には握り締めた拳の指がめり込む様に感じる。「良しツやるぞ」と胸の内で叫むだはよいが、頭はサツと過去廿年の歴史に一瞥を與れて、現在自分の眞價や實力を見積つて居た、見積られた力は依然として貧弱で取るに足らない力だつた「矢張り俺には出来ないのだ」

太い嘆息が、フーッ／＼と吐かれて前よりは一層激しい失望に襲はれる。

「駄目です……………矢張り出来ません、此の私に何が出来ませふ」

言ふには言つたが胸甲斐ない自分の言葉に我れと咎められて恥かしい思ひが全身を練める、頭は混亂して来た、もう何も分らない、唯なんとか解決せねばならぬ、解決せねばならぬといふ悶えが鐵の様に、音も立て得ない小さな心臓をツブ／＼と刺す。

噫何とかなるまいか？ 何とかなるまいか？

自分の反問が腸をちぎるばかりに苦しめる冷汗がタラ／＼と背を傳ふ果は

「ウー……………ン」

こ、餘りの苦しさに息をはずませて頭を持ち上げれば濁り切つた炭酸瓦斯が一度にドツと吐き盡されて、新しい爽やかな空気が待ち兼ねたとばかり肺臓へ飛び込む。

今丁度、空気を吸ひ込まふとする其の刹那、不思議！眞黒な大空が絹を割く様にバツと裂けて、金色の光がギラキラと流れた。天といふ天、地といふ地、總てが燦爛と輝き互る、時ならぬ黄金の幻だ。其の莊嚴な閃が、ギラツと眼底を射た時、私は何物とも知れぬ強い恐ろしい力に打たれて、全身金縛りに掛つた様になつた。

電極と電極との間で、始めは火花の様な放電が、高壓の電流を通すとビリ／＼と音を立て、漸へず微妙に振動し乍ら、美はしい紫光の一粒に凝集する様に、私は其の心行く迄に崇高な紫の光を見ると、いつも天界に潜む無限の神秘に打たれるが、私は今、地上の一切に潜む地の靈と、大空に漂る天の靈との接觸點に佇み、一個の傳導體と化して、宇宙の大靈を一處に凝らしめ、太く微細く、莊嚴な靈動を續けて居たのだ。

果然、私の頭は蕩然と舞れて、「題目」の二字がマチ／＼と夢なんだ。眞個に夢なんだ。實に不思議な夢だ。雀は窓の外で囀つて居る。あまりの意外に茫然とすれば、胸には、「題目」と取鳴つた時の苦しさが物凄く渦を巻いて居るに気付く。私はなんとも言へぬ奇妙な感に襲はれた。此の不思議な暗示について考へを廻らさねばならなかつた。私は先づ心を靜めて、シツクリ、シツクリ夢路を繰り返し始めた。意識は睡眠！大雨！眼覚め！女と娘！苦悶！題目と、電光の様に走せ戻つて、ピツクリ最後の叫びに止つた。

何といふ確信ある叫びだらう。天の諸神も來つて聞けよとばかり、地の王候も屈せよとばかり、私は自ら叫びつゝも餘りに威厳の畏しさに威打たれて奇異の感に打たれぬ譯に行かなかつた。そも此の靈夢は何を暗示してか。

私は如何にしても唯の夢として抛棄するに忍びない。其處には私自身が動もすれば忘れむとする何物か尊い警察を含むで居るのではなからうか。主義と稱して思想にのみ走り、世に阿つて、世間を論じ、自らの能力と使命を忘れて徒らに空理空論に走せむとする忌はしき、且恐るべき悪趣味を警めてではないか。

浮き出されて居た。

福音！啓示

既に其の境をすら考へる邊もなく、唯もう今が今刻みつければ許りの、鋭い直観を其儘女に向つてさらけ出さねば止まなかつた、全身の血潮が沸き返る、私は血を吐く様に叫びだ。

「痛………痛だ！」

苦しい、胸がグツと詰る。

「題目！」

モウ心臓が張り裂ける様、眞赤な血が、サツと女の全身を血濡らしたかとはばかり、

「何故………！」

聲が出ぬ、苦しい

「何故御前は………！」

もう一語も言へない、渾身の精力を振り盡して叫ぶ。

「何故御前は、題目を唱へないのだ！」

是れ迄言ひ終ればもうグツタリして、餘りの苦しさにハツと眼を開けば、

オ、天井……窓……日光……眞晝……夢

信仰。夫は法華經の第一義である。吾が徒の根本義である。是好良樂の題目即禱であり信徒の至誠の表はれである。夫は豈嘗に私とのみ言はふか、世の悉くが陥らんとする心すべき邪道であるのだ。華かに迷ふな。華かに何の安心が残りうぞ、何の力が得られやうぞ。人に力をすら與へ得ずして何の思想があり主張があり得やう。オ前は賣名の日蓮主義者となつてはならない。あの窮る程居る高僧法師は最早や斷末魔の刹那に居るのだ。オ前は高僧法師を覺醒せしめ得べき修養と戒心を持つて居るか。あの現代の誠なき説教の弊を見よ。アの忌はしき形骸の日蓮主義者を見よ。オ、お前は何時も日常の標語として聖人の御言葉を中心に刻して居るではないか。尊き持妙法華問答鈔の一節を。

「然るに人此の理を知らず見ずして名聞をもとめ狐展偏執を致すは墮獄の基なり、唯願くは經を持ち名を十方の佛陀の願海に流し譽を三世の菩薩の慈天に施すべし！」

悪趣味。夫は社會の各般に没入し盡し、今又オ前達日蓮主義者の世界迄をも襲ふて居る。胸を沈めて考へて見よ、自己の小さな満足爲に教を買ひ教を賣りたる事はないか。

或は今夫を賣らんとし、買はんとする心はないか。オ、隠す必要はない、萬人が萬人持つて居る卑しき心は之を自意識に昇らしめ來つて一時も早く菩提の薪とすればよいのだ。その心懸けこそ人の眞否のけちめなのだ。

「食法がきと申すは、出家となりて佛法を弘むる人、我は法を説けば人尊敬するなど思ひて、名聞名利の心を以て人にすぐれんと思ひて法をくらしがきを申すなり」

何等人々を教化する力のない現代の洛々たる所謂の日蓮主義者は、多くは是れ食法饑鬼の類であるのだ。法を知る事が何の權威であらうぞ、黙しても尙輝かむ釋尊の威徳を何故オ前は備へ様としないのか。無氣力利己的賣道者は「日蓮を悪しく敬ふ」の異端者であり獅子心中の蟲である。賣名の徒は心して釋尊が弘法宣傳の當時を思はねばならぬ。

比丘よ、我れは人天の一切の縛を脱したり。
比丘よ、汝等も亦人天の一切の縛を脱したり。

比丘よ、逡巡をなせ、多人の幸福の爲に、
多人の安樂の爲に、世間の憐愍の爲に、
人天の利益の爲、幸福の爲、安樂の爲に、

の障礙に道あらしめんの靈藥である、叙智である。

さるにてもあまりに尊き寶よ。私共は必ずや窮子の轡を踏むで徒らに迷ふの愚を爲してはならない。

人ヨ。パンを求むる前に題目を求めヨ。
人ヨ。パンを與へる前に題目を與へヨ。
人ヨ。新奇の論を漁るを止めて題目を唱へヨ。至誠を轉れ。無私の心を。然り。詩人ブラウニングは「現在を大に與へヨ。人には永劫を」と言つて居た。

噫肆矢壽氏

山内 櫻 溪

『人生自古誰無死、留取丹心照汗青』と宋の文天祥は賦を殘せる程なるが、雜誌『統一』が一々毎々信徒臨終の状態を詳報する一種の過去帳がましき態度に出づるが如きは、如何にも無意義なれども、肆矢壽氏の遽々然さながら掻消す如く英魂現し世を去りたる事實に就ては、予特に筆を執りて所感を公にするの價值あるを認むるなり、然り斷じて無意義に非

佛陀の教化は佛陀の熱情にあるのだ、自覺にあるのだ。身を以て佛陀、衆を教化し給ひし故に佛統は遙か三千年の今日に及びて居るのだ。佛陀といひ、基督と云ひ、其の説き給ひしは論にあらずして、淨行である。安立行である。總ては其の高潔なる熱情が來らしめし、救済の大化導であつたのだ。論は後なり末なり。信と禱より入らずして、信と禱を勤めずして、何の救済があらうぞ、救は事實にある徳にある。

「利智精進にして觀法修行するのみ法華の機ぞ、と云ふて無智の人を妨ぐるは當世學者の所行なり、是れ却つて愚痴邪見の至り也、一切衆生皆成佛道の教なれば上根上機は觀念觀法も然るべし、下根下機は唯信心肝委也」の御嚴誡こそ末代吾吾の服膺すべき一大肝要ではないか。

題目。夫は光である、力である、一切の根源である。題目を唱ふる事を忘れて何處に日蓮主義信仰の肝心があらう。先づ空論を交す前に吾々は題目を唱へねばならぬ。此れこそ眞の機會均等の權利であり最後の力である。

肺肝について出づる題目の内に佛陀の力も聖祖の徳も悉くがこもる。夫は一切の煩惱を斷滅し盡すの利器であり、一切すと信す

先づ肆矢壽其人の位地人格を一言するの要あり、氏は自慶會名古屋支部創立關係者中に其人ありと知られたる豊田利三郎氏の股肱として重用せられ、日蓮主義と豊田家との關係をして最も濃厚ならしめたる忠實穩健の士なり、本年漸やく卅八歳なれば前途尙春秋に富み好望洋々たるものありしなり、昨年來先づ國友日斌師と肝膽相照し、斯の因縁を介として本多管長と接近し、隨て當代の諸名士と親炙し、最近吾輩とも相知るに至りたり、斯くて如上人士の至言を肺腑中に咀嚼するのみならず、力めて本多師の著書を收讀し、業に既に信仰堅實の壘中に躋進し、極めて明敏なる理解と特種炯々たる識見とを併有し、最も親しき國友師と相携へ相結びて百尺竿頭更らに一歩を進むべき大活動の具體案をも心中に描き居たりしなり、山雨將に來らんとして風疾く樓に滿つ

斯の矢尖の事なりき、月の十八日若葉薫れる常德寺の奥書院に一種異りたる風流と、清淨と、趣味と、信仰とを兼ねたる集ひの會は催されぬ、免殿司の名筆を床上背面にして臨息に憑りたるは本多管長、床柱に肥滿の鈍體を倚せて胡坐した

るは拙者、國友師は宿六を極め込みて司會者の爲顔、羽織袴の威儀端然として左右兩側に居流れたるは畫伯山口瑞雨氏と一宮信者の代表者白川久太郎氏、此外清水一乘、伊東日顯、桑山惠順等の諸師數名、女儀としては瑞雨畫伯の令夫人を首め、令嬢眞瑤子、同富美子、國友久滿子、山内嘉義子及び咬書三吉嬢が殿軍の裁配を採りたり。以上座客の中堅として紺地洋服委甲斐々々しく一騎當千の虎視耽々たる一紳士ありき、是れなん實に肆矢壽氏なりしなり。

總て設けられし席に就きたる山口眞瑤子嬢は、疾く已に實驗演せる『法難劇』脚本の朗讀に取掛り、約二時間に亘りて全部讀み了り、席に復するや、傾聽聲を飲みたる座客一同は此間の感想を合作的に物せんとて、畫箋紙唐紙の類眼の前に展べられ、山口畫伯が先づ松花を描ける後、各得意の春駒秋蛇は墨痕淋漓として思ひ／＼の所感を紙上に躍動せしめぬ、是時肆矢氏が筆勢勇ましく書き流したる一句あり

『法難の素讀長こし夢の秋』

是れなり、予は流石に／＼との叫びを禁じ得ざりき、笑聲讀談悲喜交々往來して感興森々たる最中に、夜もいたく開けた

の人々達が之に同情して塵坐の列を作れるなど、人生悲哀の氣、慘として此一室に滿ちたるを覺ゆ、國友師は一行を幸わて型の如く讀經したる後、肅然として左の悼辭を聲朗らかに誦語したりぬ

悼 辭

莊周夢に胡蝶と化し遽々然覺めて歎じて曰く、胡蝶我れなる乎、莊周我れなる乎と、深草の政公母を亡ぶて悼辭を吟せんとするや、情緒寸断、意氣個々の極、至哀無文と嘆じて筆を投ぜり

肆矢壽君逝けりとの訃報、欣忽として昨予等の鼓膜を打來るや、市に度曲づと言ふよりも尙意外の變事にて、夢か眞か、予等亦莊周當年の感なからざるを得ざりき、而も乃し此に弔悼の文を讀む、如何ぞ政公當年の感なからざるを得んや、

壽君が我自慶會名古屋支部創立前後に亘る斡旋盡力の非凡なりし事實、且つ豐田家事業に身神を献げたる功勞等は予等の敬長し推察せざるを得ざる所、肆矢家としては未だ日蓮主義に改宗の式こそ擧げざれ、壽君其人の信仰は決定して疾く既に堂奥に上れること此に贊するを快たす

月の十八日自慶會棟梁本多大曾正祝下の名古屋講演一段落を告げ、將に西下の時間近きに際し、君禮抄旁見送を兼ねて我支部に訪來るや、同士祝下を擁して慰勞の淨庭を開き居たるに會せり、座に女優山口眞瑤子嬢あり、嬢は其實驗せる法難劇の脚本を朗讀し實劇以上の法感を座客に與ふ、君實に其座客の一人なりしなり、數時間傾聽

りとして、氏は坐客に諛抄して歸宅の途に就きたり

越えて廿日氏の同僚彦坂健嗣氏倉皇予等を訪ひ來り、愁然として告げらく、肆矢は昨十九日午前五時前、夜中に不歸の客となれりと、予等茫然直ちに信するを得ず、折返し仔細を問訊せば、氏は肆矢の家人親族等より親しく聽ける儘を傳へて曰ふ、『肆矢は十八日の夜十時過ぎ常徳寺より蘇鐵町の自宅に歸りたり、妻子は兩三日前より實家に歸省し新夜未だ歸り來らず、氏は入浴の後寝に就きたるが、何時もの癖として本多親下の著『日蓮聖人正傳』を手にし褥中仰臥の儘讀み居たりと思はる、醫師の診断に依れば十九日の午前一時より四五時迄の間に於て突然腦溢血を感じ其儘絶息したるものと見ゆと、成る程毫も苦痛の痕跡見えず、血色も變らず、身體安然として許かに、顔色微笑を帯びて平素の安眠と異なる所あらず』と、予等此事實を聽取りて其逝けるを首肯しぬ。

廿一日午後蘇鐵町なる肆矢宅に於ては夢の如くに逝ける壽君の葬儀は執り行はれぬ、棺側に居並ぶら若き末亡人が乳飲兒を抱きて暗涙を催せる、十五六歳とも見ゆる娘さん、又其姉さん達が愁然として力無げに端坐せる、さては親族故舊

の後、紀念の爲めにとて一月紙を展し筆を呼び席上書畫を合作す、眞瑤子の父山口瑞雨畫伯先づ松花を描き、同士思ひ／＼に詩句を揮ふや、君亦一句を題して曰く

『法難の素讀長こし夢の秋』

と、即席の妙句滿座を敬倒せしめたり、夜方に三更、津々たる興味裏に君別を告げて歸途に就く、君の逝けるは實に其夜の褥中にして仰臥の儘、本多祝下の著『日蓮聖人正傳』を手にし居たりと聞く、泡沫夢幻に等しき人生、誰か當夜の合作が君の絶筆たるに想到する者あらんや、

唯、壽君の内身は夢の如くに逝けりと雖も、日蓮主義化せる正義の發端は夢の如くに消え去らず、此に予が朗讀する一篇の悼辭は斯の事理を證明して千秋萬古我思想上に響々たるべきなり、善くは発願として靈山に往詣し、更に靈首を回らして倍々存世者の濟世聖業を冥護あれよ

大正九年五月廿一日

自慶會名古屋支部代表 國友日城 謹首

此に於て乎、十八日の淨庭列席者一同が主催となり、廿三日の午後三時より肆矢氏の爲めに追悼法會を常徳寺本堂に修し、了りて先きの奥書院に追悼講演と法難劇脚本の一節朗讀を繰返したり、講演は予之を擔任し、脚本朗讀は山口眞瑤子嬢之に當れり、床上壁間には十八日の合作遺墨と本多管長の肖像畫とを掲げ、坐ろに生前會の佛を偲ばしめにき、會者は

主催者側の外、肆矢氏の遺族、知友、故舊を合して約四十名、予感慨の餘り左の一絶を壁に題しぬ

「春秋六百尚如昨、聽取法難齊飲聲、
斯夜壽君逝不復、眼前猶得法難情」

嗟呼、肆矢壽氏は死せるに非ざるなり、予等と共に小松原當年の法難を赤心から赤心へ聴取りたる言下、遽々然工藤吉隆と化して、即ち現代予等の傳令使となりて龍に騎り靈山に往詣したるに非ずして何ぞ、而も直ちに無線電話は響き来れり曰く金城下の同人編素は、時を移さず亦直ちに第二の日蓮となりて二陣三陣の實效を奏せよ、少くも第二の鏡忍たれよ、日玉たれよとの刺戟何ぞ辛辣を極めたる、予をして此記事を公にせざるを得ざらしめたる氏の濟世的武者振は天晴れ同士中の大丈夫なるかな、我徒の本領より言ふも、五尺軀體に過ぎざる形骸の在否の如き、單に之れのみにては問題たるの價值なし、深草の政公が墓碑の如きは銅版に求むる要なし、世の人心中に鐫刻して巍々たるものあり、是れある以上は脩竹三竿にて可なりと遺言せるに思ひ合はされ、益々靈驗の不老不死

記事

統一團名古屋支部 發展記事

一宮分會發會壯觀 統一團名古屋支部に於ては、

自慶會名古屋支部の活動と相待ち、恰も破竹の勢を以て西尾思想界を産播するの概あり、一宮町は尾張美濃の兩國に虎視する經濟的有爲の地勢を占め、戸數壹萬に近かく殆んど準市の股賑市場として近年頗に頭べを擡げ、愛知縣下に在りては晉に名古屋市中に追隨するのみならず或點に於ては寧ろ名古屋を凌駕するの勢を示せり、物質界の發展斯の如きものあると同時に、精神界の飢渴は之と反比例し、謂ゆる稱して宗教と云ふもの、如きは、洛々何れも現代の社會的生活と左までの關係交渉を有するものに非ず、否其れ元來左の眞價を有するものに非ずと見極り、偏へに單だ黄金萬能を崇信する連中の涸

の肆矢氏に敬意を傾けると共に省みて大馬の勞、彼の「小草讓」にも及ばざるを愧ぢざるを得ず、左れば予の殘軀の如き之を奈何にすべき乎、史馬遷言ふあり「慷慨就死易、從容赴義難」と、予等人生の限度を食り越したる鈍漢はセメテもの罪亡ぼしに馬遷の謂ゆる易を避けて難に従ひ、堂々たる新主義新旗幟を掲げて法國の爲めに精力の積かん限り奮闘、且奮闘、以て一天四海を淨化すべく報恩の微衷を献ぐべきのみ、肆矢君たるもの佛陀神明と共に昭覽あれよ

(五月廿四日記す)

悼故肆矢壽君

野澤 悌 吾

たらちねの親の給ひし名には似て早くも世をば去れる君かな
小松原こゝにも風に散る櫻
夢のまゝ法難に殉す武者一騎

兼として中京附近に隱然一敵國を自負したりしが、伊蘭著る處に梅檀生じ、非凡の異物は却て養澤より産する如く、昨年来一二特志の有志之を愷くの餘り、現代思想界の權威たる本多日生親下を特請し去る三月始めて同地劇場歌舞伎座に思想問題大講演會を開催したりし處、近來無比の盛會を極めたること前々號所報の如くなるが、親下が獅子吼の妙作用は、見ん事同地方人無明の迷夢を覺破する動機となり、加ふるに縁機の熟來と相俟ちて五月の十四日第二回の大講演開催旁統一團名古屋支部一宮分會發會式舉行の議を決し、同日午後一時より前回の會場たりし歌舞伎座に舉行するに至りぬ。

此日や晴朗一碧拭ふが如く實に日本晴の好天氣、新緑風に薫りて快言ふべくもあらず、左れば繁商地の眞晝間なるにも拘はらず、講演渴仰の情溢れて定刻前既に二千の聴衆會場に滿ちたり、式は左の順序に依て舉げられぬ

- 一、開會宣言 司會者 安田秀太郎
- 二、趣意書朗讀 總裁 本多日生
- 三、祝辭 國友名古屋支部長
- 四、同 佐藤海軍中將代讀 白川久太郎

五、同 大日本救世團代表 野澤陸軍少將
森殿の態度時々しく満場感に打たる、斯くて講演に移るや

- 一、帝國の危機 山内 櫻溪
- 一、東洋文明の權威 野澤 少將
- 一、將來の文明と法華經 本多 日生

論旨堂々、條理明晰、大は對世界的國家經綸の妙諦より、小は個人精神の修養談に及び、三講師が半日の獅子吼は滿場三千に近き聽者をして轉迷開悟捨邪歸正せざるを得ざらしめ拍手の聲乾坤を震撼するばかりなりき、斯くの如くにして統一團一官分會發會式の狼狽は首尾徹底的に揚げられ畢んぬ、人天の感應眞に法悦に禁へざるなり、最後に野澤少將の發聲にて天皇陛下の萬歳を三唱し午後六時散會せり

枇杷島分會發會式

翌十五日午後一時より枇杷島祖師堂に於て、一宮同様統一團枇杷島分會發會式舉行の快事あり、同地は尾張日蓮主義者の根據地とも謂ふべき歴史を有する地方にて活指導者其人の有るあらんには、分會の設置今日を俟つまでもなかりし法縁を有する地方なるが、惜哉此種覺醒の導師を缺きたるが爲め有志者は衷心より之を齎痒く思ふの餘り、一宮同様今春始めて統一團の光輝に觸れ奮然起て

教化の可能性を有する大阪

る大阪

池上大阪市長が市内宗教家を招集して教化事業に就て懇談し依頼しても根から成績が上らず、本化聖教團が日蓮門下全體の力を以てしても猶且つ微々として振はず今や其存在の有無すら疑はるゝに到れる大阪は教化の可能性を失へるか、終また宣傳の徹底を缺けるか

浮薄の大阪、輕誕の市民、果して教化し能はずとせば一天四海皆歸妙法は空想のみ、「教愈々實なるが故に位愈々低し」と吾等は大阪市民の教化の可能性を信ず而も今それを實證する事を得たり。

五月廿二日午後七時半大阪天王寺公會堂に思想問題大講演會を開催す、講師としては本多大僧正(思想問題の歸妙陸軍少將丹羽剛閣下の(國運の消長)なり、大毎大朝の新聞廣告と幾十の大立看板の廣告と數千枚の案内とは大阪の市内廣告としては蓋し餘りに勤きを覺ゆ況んや思想問題などには甚だ縁遠き物質の大阪としては、と幹部一同は杞憂したりき、然も其豫想のはづれたるを喜ぶ、六時に新聞博覽會の餘興の終りたるを俟ちて會場の準備にかゝる六時十五分に到りて早くも聽衆は押しかけたり七時に到りては早や六七分の入場者あり拍手して開會を要求す而も其度は熱烈なり講師は未だ臨席せ

一宮に遷らじとの意氣込中に發會式を擧るに至れり、此日も亦無比の快晴、來會者堂に溢る、司會者は岡野龍六氏にして式の順序並に列席者は一宮と同きを以て省く、尋で

- 一、宗教的復活 山内 櫻溪
- 一、歡喜の生活 野澤 少將
- 一、日蓮主義の特長 本多 日生

の三氏講演あり、滿座法益に浴すること毫も一宮と異ならず、薄暮野澤少將の發聲にて前と同じく天皇陛下の萬歳を三唱し日蓮主義の威力緊張裡に散會せり

四日市分團創立

三周年紀念大會は五月十一日を以て開かれぬ、同地は既に新寺建立の基礎も定まり、工事も着々進捗中にて、日蓮主義渴仰の人士も次第に増加し、近き將來に大好望の光輝を認めらるゝ折柄なれば、同日午後七時には會場湊座に集まる聽衆約一千五百人と詮せらる、此日特請に應ぜられたる、講師は本多總裁野澤少將の兩氏にて

- 一、現代文明の批判 野澤 少將
- 一、思想問題と法華經 本多 總裁

の大講演あり、多大の感動を來會者に與へ、甚深なる印象を人心に刻して十時 陛下の萬歳を三唱し散會したり。

られず止むなく京師師は立つて開會の辭を述ぶ七時三十分分に到りて上田師又交りて壇上に立つ七時四十分講師の自動車延着す聽衆は既に會場に充ち椅子は不足せり丹羽少將は直ちに軍服佩劍の姿を壇上に運び一時間に亘りて或は論じ或は論し至誠聽衆の肺腑をつく、川崎布教師の紹介によりて本多大僧正の英姿に接したる階上階下三千の聽衆は一同に急激の如き拍手をなせり、陛下の公明該博なる卓見と其流暢なる辯論とは之れ大正の日連なるべしとのさゝやきを聴くに到れりかくて十時半閉會す、翌廿三廿四日の兩日は晝は自慶會の工場講話に夜は大阪醫師會事務所に於て法華經要文講義會を催す、廿二日の大會に聽衆に配布したる統一團支部設立趣意書は左記の如くなるが六月に入りて愈々統一團大阪支部創立の準備に着手すべく既に入團申込者も多數あり。

統一團大阪支部設立趣意書

未曾有なりし世界の大動亂は文明改造を齎せり、之を我國の現状に見るに國民の思想は急激なる變化を來さんとす、しかも其推移の方向は健全なりとして樂觀すべくもあらず寧ろ甚しく危險化せんとするものゝ如く、眞に刻下の重大問題なり「教なき人の性は波に動く月に異ならず」と宜しく啓發し善導せざるべからず。七百年の往昔聖者日蓮によりて主唱せられたる開顯統一の明教は時弊匡救の針路なり、三千年の歴史の文明を尊重しつゝ外來思想に對しては自主的批判を嚴密にし頂迷を斥け輕詭を誅め以て日本文明の根本基準を闡明せり「日は東よ

り出で、西を照す佛法必ず東土日本より出づべし、日蓮によりて日本國の有無はあるべし」と言へり、誰か其識見と抱負とに共鳴せざらんや、博士高山樗牛曰く、「和氣清賢、補正成、豊田秀吉を生みし日本は左程大なりとは思はずされど、獨り日蓮を生みし日本は實に大なり」と我等は日本に生れたるを感謝す、而して日蓮を生みし法華經に遇ふ事を得たるを感謝す。

統一團は大僧正本多日生師を總裁とし本部を東京に置き各地に支部を設立す、吾等同人茲に統一團大阪支部を設け之を小にしては一身一家の安定を希ひ之を大にしては國家社會に貢献し文明に資せんとす。

大正九年五月

統一團大阪支部

(大阪市東區西高津中寺町蓮成寺中)

△大阪府三島村民力涵養會發會式

京都の宣傳を終りたる本多大僧正は五月廿二日午後二時三島村民力涵養會に列席せられ總持寺に於て左の講演あり聴衆三百餘

開會の辭

民力涵養の趣旨

△自慶會講演

五月廿三日大阪安治川鐵工所に於て六百人の職工の爲めに人格の修養と佛教

廿四日午後四時より大阪發動機製作所に於て五百人の職工

に對し

修養の三方面

本多大僧正

廿四日夜八時より合同紡績女工七百人の爲めに

精神の修養

川崎英照

△明石市修養團講演

廿五日後三時より公會堂に於て智識階級者の爲めに

予が佛教大觀

本多大僧正

同夜八時より明石市公會堂に於て千餘名の聴衆に對し

開會の辭

中川軍醫少將

人格の修養と佛教

本多親下

△法華經要文講義

大阪醫師會事務所樓上に於て本多親下の法華經要文講義の

續講あり聴講者三百餘名

「統一會計より」

整理の必要あり前金切れの方は至急此際御送金被下度、會計より通知するも御送金無之節は雑誌の發送は見合すべく候

日蓮主義 戰士の伴侶

一部金壹圓八拾錢

民心變動の兆頗る急を告げ日蓮主義の戰士に對し進軍を促すこと切なりこの要求に應じ戰士の伴侶として教義の秘奥を開示せるもの實に本書なり書中論明する所は、思想問題と日蓮主義 宗教信仰の要義、法華經の五大教義、本尊の要義と其歸結、信行の要義と其歸結、得益の要義と其歸結、佛教人身觀の概要、佛教倫理觀の概要の八大編にして記述極めて懇切なり知法思國の戰士速に一本を軍營に備へて新略を遂ること莫れ。

思想の惡化善化

一部金六錢百部以上五錢ノ割送料一部金貳錢

本多大僧正撰

法華經要文

一部定價 並製 金參拾錢 上製 金五拾錢 送料 金四錢

本多日生師著書一覽

○法華經の心髓 壹圓參拾錢

○日蓮主義の運用 金壹圓八拾錢

○聖訓要義 卷一、二、三、四、五既刊、卷六金壹圓七拾錢

○開目鈔詳解 上卷一部 金貳圓

○聖語 金貳圓貳拾錢

○日蓮主義の初歩 金七拾錢

○東洋文明の權威 金壹圓八拾錢

○日蓮主義の權威 金壹圓貳拾錢

○修養と日蓮主義 金壹圓貳拾錢

○日蓮聖人の正傳 金壹圓八拾錢

○日蓮聖人の感激 金壹圓八拾錢

○日蓮主義の綱要 金壹圓貳拾錢

○國民道徳と日蓮主義 金壹圓貳拾錢

○優婆塞戒經通解 金八拾五錢

○大乘本生心地觀經通解 金八拾五錢

○國民教化 金壹圓八拾錢

○法華經の伴侶 金壹圓八拾錢

○戰士の伴侶 金壹圓八拾錢 各送料八錢

○法華經講義 上 各送料八錢 下 各送料八錢

○大藏經要義 一部金壹圓貳拾錢 送料一部八錢 半年前金送料不要

購讀希望の方は左記へ申込まるべし

東京市外品川妙國寺内

大藏經要義刊行會

振替東京三一五九六番



次 目

人類文明の基礎(時言).....	本多日生
一、根本基準.....二、現代文明の失態.....三、文明と誤れる哲學.....四、	
日本、哲學.....五、文明と道徳の規範.....六、日本人の道徳.....七、宗教と	
人生の幸福.....八、宗教の我利せし所以.....九、日本に於ける排佛の愚學.....	
一〇、佛敎信仰の效果.....一一、日本人の天職.....	
危険思想に對する警戒.....	本多日生
思想善導に關する所見.....	佐藤鐵太郎
照顧閣下.....	山内櫻溪
人生觀と道徳.....	本多日生
日蓮上人の心直.....	本多日生
日蓮上人教義綱要.....	井村日日生
濠洲に於ける社會政策.....	井上清純
記事、報道十數件.....	

第廿四年七月號

發行所東京府在野郡三貝町青島町四百十二番地